

# 地域と大学

## ——城西大学・城西短期大学地域連携センター紀要——

2021年3月 創刊号

巻頭言	学長 藤野陽三	1
創刊に向けて	副学長 于洋	2
<b>【査読論文】</b>		
「奥武蔵」の誕生	加藤寛之	4
<b>【論文】</b>		
越生町の固有品種「べに梅」果実の科学的特徴	飯塚讓・金賢珠・松本明世・君羅好史・清水純・真野博	16
<b>【地域教育実践報告】</b>		
埼玉県における地域住民の質の高い暮らしを目指した専門職連携教育 ——彩の国連携力育成プロジェクト (SAIPE)	古屋牧子・上田秀雄・白幡晶・大嶋繁・村田勇・高尾浩一・小糸寿美・ 堀由美子・水野文夫・岩田直洋・細谷治・小林大介	22
小川町にぎわい創出課との連携による地域教育——留学生対象「日本文化研修Ⅰ」における学外授業——	村越純子	28
<b>【地域連携報告】</b>		
図書館から広がる地域連携——知の拠点、地域の拠点を目指して	小川佳菜子・宮内博子・甲田さと美	39
<b>【地域情報】</b>		
オオサキを見た！——飯能・秩父地域に伝承される未知の生物目撃談	平井大作・平井亜未・加藤寛之	48
<b>【地域活動ノート】</b>		
医療栄養学科におけるアクティブラーニングを介した学生の自己効力感の向上に対する試み ——医療栄養学概論演習による高麗川プロジェクトの活動報告	岩田直洋・古屋牧子・関口祐介・君羅好史・大澤吉弘・松本明世・真野博	52
医療栄養学科における農作業体験を通じた学生の食への興味・関心の向上に対する試み ——収穫したさつまいもを使ったレシピ作成	古屋牧子・岩田直洋・加藤勇太・関口祐介・君羅好史・大澤吉弘・松本明世・真野博	54
管理栄養士資格を有する大学院生による特定健康診査の機会を利用した食育活動 ——ときがわ町における3年間にわたる実践報告	君羅好史・加藤勇太・荒井健・大澤吉弘・清水純・真野博	56
管理栄養士有資格者大学院生の特論演習科目を通じた地域活性化の取組 ——「北坂戸にぎわいサロン通信薬学部医療栄養学科コラム&レシピ」の作成	野村佳歩・塩原由菜・手塚宥哉・久保正徳・大澤吉弘・君羅好史・真野博	58
「疑わしくは行動せよ！」J-DAG (Just-Disaster Action Game) を活用した地域連携・教育実践例の紹介	飯塚智規	60
東武鉄道越生線沿線プロモーション作品の制作	庭田文近・現代政策学部庭田ソフォモアセミナー2020年度履修生	62
2020年度 城西大学・城西短期大学の地域活動		64
『地域と大学——城西大学・城西短期大学地域連携センター紀要』投稿規程		73
編集後記		75

# 巻 頭 言

城西大学学長 藤野 陽 三

城西大学は1965年に創立されて以来、今日まで坂戸市けやき台にキャンパスを構えてきました。今でも、当時の風景から恐らくさほど変わっていない長閑（のどか）な環境の中にあるのはいろいろな意味でとても嬉しいことです。コロナ禍の中にあつての城西大学ではキャンパス内、通学路の中で感染した学生、職員がこれまで皆無でしたが、これも立地が影響しているのだと思っています。都心の大学とは違うと言えるでしょう。

城西大学は埼玉県西部にあります。そこには100万人を越える方々が住み、様々な生産活動を営まれていることは勿論ですが、商業、運輸、医療、教育、建設等々様々な活動が日々行われています。そこにはいろいろな問題、課題があり、関係者はその改善に向けて励んでおられます。大学にとっての地域連携とは正しく、地域の生きた問題、課題をじかに知り、研究教育に生かすことだと思います。そういう意味では地域あつての大学であり、地域に育ていただき、大学がそして学生が育つのです。我々の立場から城西大学の知を活かしての地域連携の中で地域の振興に少しでもお役に立ち、その中で学生が地域の方々と活動し成長する、このようなウィンウィン（win-win）の関係が築かれることを祈念しています。

城西大学は2016年に地域連携センターを開設し、いつでも皆様からの声をお待ちしています。遠慮なく、気兼ねなく、おいでください。皆様からの依頼に待っているだけではないとも思っています。我々大学人がもっと地域の中に入って、新しい地域連携を始めたいと思っています。よろしく願いいたします。

# 創刊に向けて

城西大学副学長 于 洋

2020年4月より、国際教育および地域連携担当の副学長に就任いたしました。本学は中期目標（J-Vision）のなかに、人間力をもつ地域社会および国際社会に貢献する人材の育成のため、地域連携、海外連携を強力に推進することを掲げています。この使命を果たすために鋭意努力していく所存でございますので、よろしく願いいたします。

少子高齢化の急進やグローバル化の進展など、大学をとりまく社会的環境が急速に変化しつつあります。このような環境変化に伴い、教育研究を主要なミッションとする大学は、教育研究活動によって生み出された成果を積極的に地域社会および国際社会に発信・還元すること、すなわち大学の地域貢献・国際貢献ということも重要な使命と期待されています。

本学は、理学部、薬学部、経済学部、経営学部、現代政策学部といった文理融合型な学部構成となっています。また、創立されてからの55年間において、地道に積み重ねてきた教育研究の経験・蓄積・成果がたくさんあります。地域貢献・国際貢献に対して、文理融合型の教育資源の活用、教育研究の蓄積と成果の具現化は地域連携センターの役割と考えます。

本学のホームページ（生涯学習・地域連携）に公表されているように、地域連携センターはこれまで実に多くの公開講座、プロジェクト（J-CLIP、TJUP）、ボランティア活動などを積極的に行ってきました。大学と地域とつなげるために大きな役割を果たしています。

この紀要には、地域連携とかわりのある教員・職員の研究成果をまとめただけでなく、令和2年度に城西大学地域連携センターおよび本学教職員が携わってきたさまざまな地域活動の記録も収録されています。これらの活動内容と研究成果は本学の地域連携活動にとって大切なものです。今回の刊行を契機に、学生および教職員の努力の積み重ねによる成果を記録し、本学における今後の地域連携活動の発展に貢献できると確信しています。

日本経済新聞社は全国の国公立大学を対象に、大学が地域社会に対してどのような貢献をしているか調査していることをご存知だと思います。国立大学や公立大学が総合ランキングの上位を占める傾向が続いています。さまざまな背景があると思いますが、私立大学としての本学は上記調査ランキングの上位を目指して、これまで培ってきた文理融合型の教育研究資源を積極的に活用しながら、「地域志向」と「国際志向」とを合わせて、自治体、企業、さらに海外との連携活動を一層邁進していきたいと考えています。

城西大学の教員・職員および学生全員が、地域社会の発展に貢献するために地域連携活動の推進に精一杯取り組んで参ります。改めて本学の地域連携活動への皆様方のご理解と積極的なご参加、ご支援をお願い申し上げ、ご挨拶とさせていただきます。

# 地域と大学

—城西大学・城西短期大学地域連携センター紀要—

創刊号（第1号）

2021年3月

城西大学・城西短期大学 地域連携センター

【査読論文】

## 「奥武蔵」の誕生

加藤寛之\*

キーワード：奥武蔵、武蔵野鉄道、西武鉄道、飯能、吾野

### はじめに

「池袋」駅から西武池袋線に乗り1時間で着く「飯能」駅は、ハイキング適地「奥武蔵」の入り口だといえる。この「奥武蔵」という語句とイメージは、武蔵野鉄道（現西武鉄道）が取り組んだ観光開発の成果である。筆者は当地の近・現代の諸事項を整理・再検討し、後世の研究の便に資することを目的にした資料の収集と整理を行っている。そのなかで「奥武蔵」という語句について、武蔵野鉄道が観光開発の用語として創造し用いることで種々の変遷を経ながら今日のイメージを獲得したものであることを、あらためて考察したものが本稿である。

「奥武蔵」の語句と武蔵野鉄道の関係は、これまでにほとんど考察されることがない。飯能市史編纂に従事した経歴をもつ浅見徳男が『飯能の住民が燃えた時－武蔵野鉄道と観光開発－』で「大いに関係がありそうである」と言及していることが唯一であろうが、そこに論考や資料の提示はなかった。また、飯能市が市史編纂事業で刊行した飯能市史編集委員会『飯能市史資料編Ⅺ 地名・姓氏』の地名索引に「奥武蔵」はみられない。

本稿はこの「奥武蔵」という語句の形成と範囲について、当時の出版物や資料を基に帰納的な手法で名称誕生と今日あるイメージを獲得する初期段階までを概観する。

### 1. 「奥武蔵」の語句の現状

埼玉県の西部を走る西武池袋線と西武秩父線沿線の山間部を紹介する旅行案内書や山歩きのガイドブックは、例えば「奥多摩・奥武蔵」「奥武蔵・秩父」のように、ごく普通に「奥武蔵」という語句を用いる。「奥武蔵」はこの地域を表す語句であるが地名では存在せず、西武池袋線と西武秩父線沿線の山間部を表す観光案内の語句として用いられることが多い。

「奥武蔵」の行政上の用例では、埼玉県が昭和26年（1951年）3月9日に「県立奥武蔵自然公園」を指定したことが早期の例であろう（図1.1）。近年の例では、飯能市が山間部にあった小学校3校を統合する施設隣接型小中一貫の新校を「奥武蔵創造学園 飯能市立奥武蔵小学校」と命名して平成31年（2019年）に開校しており、「奥武蔵」は行政上でも用いられる語句である。

---

\* 城西大学広報課長



図 1. 1 「県内の自然公園の概要」  
出所：埼玉県Webページ「埼玉県の自然公園」埼玉県ホームページ  
(<https://www.pref.saitama.lg.jp/a0508/shizenkouen/midorishizenka.html>, 2020年11月22日閲覧)

## 2. 武蔵野鉄道のハイキング勧誘

現在ではごく普通に用いられる「奥武蔵」は、昭和初期に創出された語句である。種々の記述から命名者は武蔵野鉄道とみられるが、「奥武蔵」についての明確な宣言や定義の類は見当たらない。

昭和44年（1969年）発行のハイキングガイドブックである岳朋会『奥武蔵』に次のようにある。

「奥武蔵という名称は、それほど古いものではなく、昭和に入ってハイキングが盛んになりはじめた当時に、その頃の武蔵野鉄道がこの名を使い始めて宣伝してからである。」

武蔵野鉄道は、現在の西武鉄道の前身である<sup>1</sup>。「奥武蔵」の語句が武蔵野鉄道とハイキングに関係していることは、昭和39年（1964年）に坂倉登喜子「奥武蔵からヒマラヤへ」でも記述している。坂倉登喜子はハイカーである。

「奥武蔵という名がつけられる以前、武蔵野電鉄が、この地方の開発に力を入れ、奥多摩の溪谷美に対して、丘陵と峠と山村の佳さを持つこの地域に、武蔵野の奥山「奥武蔵」という名をつけて、世に広く紹介されて以来その発展開発は目覚ましいものがあった。」

武蔵野鉄道は汽車でなく電車であることを表現するために社名と異なる「武蔵野電車」を自称しており、文中の「武蔵野電鉄」が武蔵野鉄道であることは明らかである。

1 武蔵野鉄道については、飯能市郷土館（2015）『西武鉄道飯能池袋間開通100周年記念特別展武蔵野鉄道開通』が丁寧にまとめている。

太平洋戦争前から奥武蔵の山や集落を訪れていた神山弘は、神山弘・新井良輔『増補ものがたり奥武蔵 伝説探訪二人旅』で次のように記述している。

「「奥武蔵」の名は西武鉄道が付けたというのが本当らしい。なにしろ太平洋戦争の始まる前の半世紀以上昔なので、確実なことはわからないが」「もと武蔵野鉄道とっていたこの西武線沿いの山々には未だ総称名が無かった。そこで奥ばやりに乗って、武電の宣伝部あたりが命名したこれは、武蔵の国の奥というよりも武蔵野電車からとったものなのである。」

神山弘は、「奥武蔵」の名が武蔵野鉄道の命名で、武蔵野電車からとった語句であると記述しており、これは後述したい。

昭和39年（1964年）発行の奥武蔵研究会『奥武蔵』十五周年（100号）記念号所収 岩崎京二郎「奥武蔵の範囲」に、次の記述がある。岩崎は「奥武蔵」の範囲や語源を柔軟にとらえている。

「奥武蔵という地域の範囲はどこまでをいうのだろうか。これはわかったようではなかなかわからぬ問題であると思う。」

「今は絶版となり手に入り難いが、当会の大石真人氏や坂倉登喜子氏を含んで組織していた、ハイキングペンクラブで昭和の初期に出版した「奥武蔵」には筆者は総論を書き、その序めに奥武蔵考を書いたが「奥武蔵」の名のわれらの前に大きく現われたのもそう古いことではない。武蔵野鉄道（現西武鉄道）が飯能終点より山間吾野の地へ通じ木材石灰石その他の貨物運搬を重とする経営より、勃然と起れる登山ハイキングの動向を利し、奥武蔵の汎称を与え登山ハイキングの施設を漸次伊豆ヶ岳、正丸峠、子の権現、高山不動附近の山地へ加え初めたころであったと思う。」

「ペンクラブ著の「奥武蔵」には川崎隆章氏の武甲山とその周囲を筆頭として、橋立川廻行（大門八郎氏）八嶽を繞る沢（大戸井健一氏・宮沢和秀氏）から、三ツドツケを繞る沢まで収録した。あえてこの秩父の範囲と思われる山城まで収録したのは、武蔵野いや武蔵の国の奥の意も含めてのものであったからである。」

最後に、「奥武蔵」の語句に対する地元住民の意識の例を紹介する。飯能市にある地元紙「文化新聞」昭和27年（1952年）2月28日付に掲載された「山郷雑記」に次の記述がある。

「奥武蔵という呼称が、何時、何所で、何人に依って言ひならされたかわたしは知らない。戦前原市場で、ワサビを作った人が、その包装紙に奥武蔵名産と銘打ったことは覚えているが、とに角、戦前余り古い事ではなかったらう。そして是は奥多摩にならった呼称であろう。」

### 3. 「奥武蔵野」の語句の存在

「奥武蔵」の語句の用例で、武蔵野鉄道の観光館案内書である大正4年（1915年）発行の山田勇雄

『武蔵野鉄道案内』の飯能町から紹介したい。同書は巻末の自社広告に「本協会は東上鉄道株式会社武蔵野鉄道株式会社より案内記の編纂及び出版を委嘱され既に之を発行したるのみならず…」とあって、武蔵野鉄道の意向を受けた案内書である。

「…武蔵野鉄道が開通して愈々東都との連絡が開始され茲に益々飯能町は発展の域に進み奥武蔵無尽の宝庫は…」

大正4年(1915年)は武蔵野鉄道が「飯能」駅まで開通した年である。当時の飯能町の行政区域は、現在の市街地部分に近い範囲である。「奥武蔵」の語句を、武蔵野鉄道の終着である飯能町の表現として用いていることに注目されたい。「奥武蔵」の語句はあるが、現在の認識される「奥武蔵」とは異なる使い方である。

あらためて、現在の認識である「奥武蔵」の語句の形成を述べたい。

飯能の遊覧地を紹介した武蔵野電車発行パンフレット「奥武蔵野 遊覧コース御案内」がある(下線筆者)(図3.1、図3.2)。表紙に3人の親子らしいハイキング姿を描いている。内面は飯能町の観光地図になっており、そこにも「奥武蔵野遊覧コース」とあり文中にも同語句が使われている。



図3.1 「奥武蔵野 遊覧コース御案内」(外面)

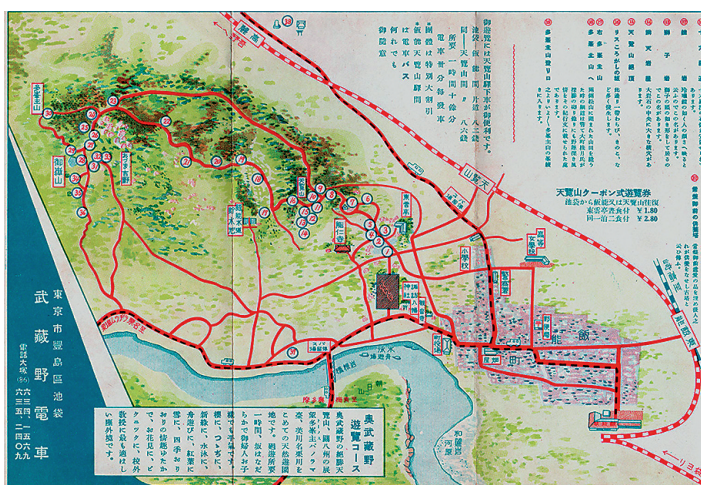


図3.2 「奥武蔵野 遊覧コース御案内」(内面 部分)

この観光パンフレットには製作年の記載がないが、地図から製作時期を絞ることができる。

- ・「天覧山」駅がある。天覧山駅は昭和6年(1931年)4月1日開業、昭和20年(1945年)2月3日休止である。
- ・昭和8年度(1933年度)には造成が済んだ現在の中央通りが描かれている<sup>2</sup>(図3.3、図3.4)。
- ・広告面とみられる温泉旅館東雲亭の紹介文に「昭和7年(1932年)11月23日の朝日グラフ所載の次の記事を御覧ください。」とあるので、その後ではあるが直近の製作である可能性が高い。

2 地図「消火栓之位置」の図中に「昭和八年度舗装工事施工箇所」「昭和九年度舗装工事施工予定箇所」とある。舗装は上水道管理設後でないといけないので、昭和8年度に道路が完成したことになる。これらから、昭和7-8年(1932-1933年)ころに製作のパンフレットと推定できる。この時点でパンフレットは飯能町を「奥武蔵野」と紹介している。「奥武蔵」ではない。



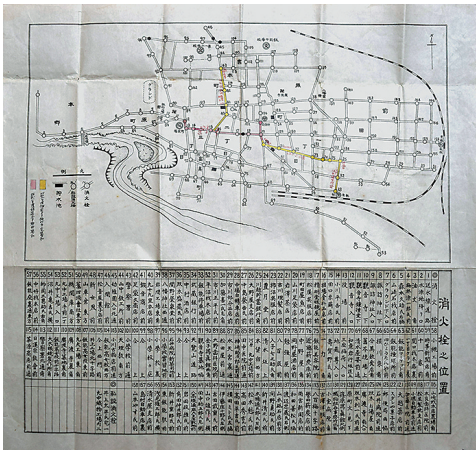


図 3.3 「消火栓之位置」(全体)

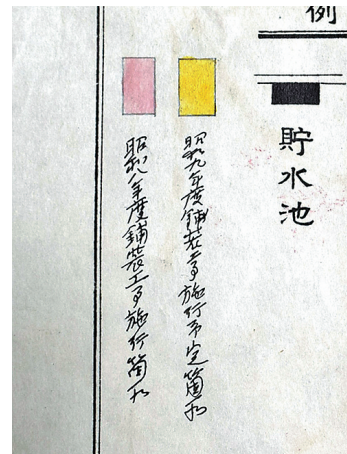


図 3.4 「消火栓之位置」(部分)

類似の武蔵野電車発行パンフレット「飯能 天覧山」がある(図 3.5、図 3.6)。表紙は天覧山頂上の展望台を描いている。これも内面は飯能町の観光地図になっており、そこにも「奥武蔵野遊覧コース」とあり文中にも同じ語句が使われている。このパンフレットは文中に「昭和12年(1937年)5月同軍戦跡の天覧山麓に」とあることから、それ以降の製作である。

観光パンフレット類は、現在のそれと比べて記述等が寛容であって正確性に疑問は残るが、「奥武蔵野」の語句が存在したこと、「奥武蔵野」が飯能町をさしていたことがわかる。



図 3.5 「飯能 天覧山」(外面)



図 3.6 「飯能 天覧山」(内面 部分)

#### 4. 「奥武蔵」の語句の形成

このころ、武蔵野鉄道は事業拡大を進めていた。昭和4年(1929年)9月に「飯能」駅から「吾野」駅まで線路を山岳部へ延伸、通称吾野線(以下、吾野線)が開通した。「吾野線は、乏しくなりつつあった青梅地方に代わる石灰石の供給地として吾野を当てたいとする大株主の浅野セメントの意向が強く働き、採算を度外視して建設された」。「またこの時期、武蔵野鉄道は奥武蔵高原など低山地

帯のハイキングの宣伝に力を入れ始める」<sup>3,4</sup>。

武蔵野鉄道の観光開発の関心は、吾野線の延伸に伴って、飯能町から、より奥地の吾野へ向いたと推定される。

観光開発の関心が飯能町から吾野に向いたことを推定させる一例を示す。前述の武蔵野電車「奥武蔵野 遊覧コース御案内」の文中に「関八州の展望多峯主パノラマ臺」とある。一方、武蔵野電車発行パンフレット「奥武蔵の雄 伊豆ヶ岳 奥武蔵の峠」（図4.1、図4.2）は、昭和4年（1929年）9月開通の吾野線を記載し、昭和13年（1938年）11月竣工の厚生道場<sup>5</sup>の記載がないことから、その間の製作と推定できるが、これには高山不動堂の奥の院に「關八州展望臺」と記載がある。関八州の呼称が、飯能町の山から吾野の山に移っている。

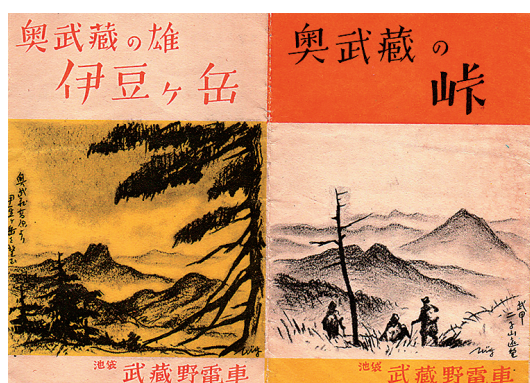


図4.1 「奥武蔵の雄 伊豆ヶ岳 奥武蔵の峠」（外面）

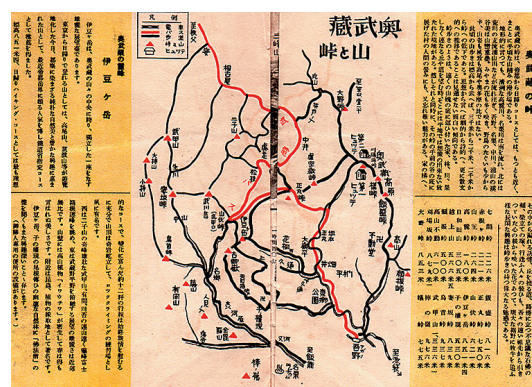


図4.2 「奥武蔵の雄 伊豆ヶ岳 奥武蔵の峠」（外面 内扉）

前述のように「奥武蔵野」の呼称が存在したのではあるが、「奥武蔵」の呼称については奥武蔵研究会『奥武蔵』奥武蔵研究会創立五十周年記念号に、同会会長の大石真人による次の記述がある。文脈から取締役とは武蔵野鉄道の取締役であるが、思いついた時期を含め真偽は不明である。

「奥武蔵という名は、戦時中に、当時の取締役で宣伝担当の某氏が刈場坂峠から丸山へ登るハイキングをしていた時、ふと思いついた名前とのことで…」

昭和9年（1934年）初めの冬に武蔵野鉄道が開業した「奥武蔵スキー場」<sup>6</sup>は、吾野線による観光開発で明確に「奥武蔵」を冠した施設である。神山弘・新井良輔『増補ものがたり奥武蔵 伝説探訪二人旅』の新井良輔「越生カッパ屋の聞き書帳」に「スキー場のあった刈場坂峠」の項があり、該当

3 「吾野線」は武蔵野鉄道の延伸であり、後継の西武鉄道も「吾野」駅～「池袋」駅間が西武池袋線である。だが、「吾野」駅～「西武秩父」駅間の西武秩父線開業以前には「飯能」駅～「吾野」駅間を「吾野線」と呼称することが一般的であった。

4 飯能市郷土館（2015）『西武鉄道飯能池袋間開通100周年記念特別展武蔵野鉄道開通』p.27, 29より。

5 厚生道場は、「正丸峠キャンプ場」の中心施設。昭和13年11月竣工。藁葺の日本家屋の宿泊所で豪華な山小屋だった。厚生道場の呼称は、「文化新聞」昭和29年9月9日によると「真面目な名称をつけないと連れ込み宿のように誤解」されるので「厚生省が発足したのにちなんでも厚生道場と云う至って野暮臭い名称をつけた」とある。

6 同スキー場の付属施設として「奥武蔵高原ヒュッテ」もあった。

部分を転載する。

「武蔵野鉄道は昭和4年（1929年）、飯能－吾野間を開通させましたが、折からの不況で、予定していた石灰岩の輸送も少なく経営不振になり、これを挽回しようと秩父に連なる沿線の山を奥武蔵と名付けて、ハイキングの宣伝に力をいれました。昭和11年（1936年）には正丸峠の山岳道路と、当時厚生道場といった今のガーデンハウスも完成して、一気に東京近郊のハイキングのメッカになったのですが、冬場の旅客誘致の一つとして開いたのが刈場坂峠のスキー場でした。

今まで外秩父と総称されていたこの峠道一帯を奥武蔵高原と名付け、無名の草刈場の入会地を、草刈場へ登る坂の意味から刈場坂峠と呼ばせ、さらに高原での最高峰の三角点879メートルをつつじ山と命名しました。峠にはヒュッテも建ち電気も引いて、第一ゲレンデ、第二ゲレンデと整備された名実共に奥武蔵スキー場が誕生したのです。

この辺は海拔も800メートルを越し、気温も氷点下10度ぐらいには下がるので、雪さえ降れば結構スキーを楽しむことができます。そこへ昭和11（1936年）年の大雪があったのですから、吾野駅からスキー場入口の子ノ神戸までのバスは、後部にスキーを乗せる台をつけて、満員のスキー客を運んだものでした。白銀の奥武蔵高原にスキー場の灯がまたたくのが、越生からも眺められました。

スキー場は正式には秩父郡大柵村大野の秣場でしたが、盛況だったのは一年だけで、翌年からは新聞のスキー欄にも、毎日積雪ゼロと出るしまつで、東京から一番近い奥武蔵スキー場も余り活躍の場はなく、春の淡雪のように消えてゆきました。」

文中にある「奥武蔵高原」は、吾野駅の東北方から西北にかけて約15キロの長さにわたる高原状のなだらかな尾根を呼称したもの。この間に顔振峠・飯盛峠・ブナ峠・刈場坂峠・大野峠がある<sup>7,8</sup>。武蔵野電車「奥武蔵の雄 伊豆ヶ岳 奥武蔵の峠」に「奥武蔵高原」の記述があることから、「奥武蔵高原」の名も奥武蔵スキー場の開業ころに武蔵野鉄道が付けたと考えられる。

武蔵野鉄道の延伸によって、終着が「飯能」駅よりも地理的に奥地である「吾野」駅になったことが契機になって、武蔵野鉄道によって「奥武蔵」の語句が使われることになった。武蔵野鉄道の終着が飯能町である「奥武蔵野」からさらに奥地へ移動することで「奥武蔵」の語句が創出されたと推定されよう。つまり、「奥武蔵」あるいは「奥武蔵野」は、武蔵野鉄道の終着を意味する語句であると推定できる。前述した神山弘の「奥武蔵」の名は武蔵の国の奥というよりも武蔵野電車からとったものとの見解は、妥当なものと考えられる。

## 5. 「奥武蔵」の範囲

冒頭に述べたように、「奥武蔵」がどの地域をいうのかは判然としない。その原因は命名以降の武蔵野鉄道の観光戦略にもあった。

7 2020年現在、「奥武蔵高原」の呼称をみることはない。ほぼ同じ道筋に観光道路の奥武蔵グリーンラインが開通して名前が置き換わった。木が生長し高原感も失われた。

8 西武電車（1962）「奥武蔵ハイキング」（'62年版（37年2月））参照。

それは、昭和11年（1936年）に正丸峠を越えて秩父に至る「正丸峠ドライブウエー」が開通したことで、秩父を含む一体を武蔵野鉄道が運行するバスで吾野から行ける観光地として誘導したことが関係するとみられる<sup>9</sup>（図5.1、図5.2）<sup>10</sup>（図5.3、5.4）<sup>11</sup>。このことで秩父方面への範囲が曖昧になった。また、「奥武蔵高原」から越生方面へ抜けるルート、寄居町から秩父を経て正丸峠ドライブウエーで吾野に至る回遊ルートを経由して観光案内したこと<sup>12</sup>（図5.5）で、現在は外秩父と呼称される山々との関係が曖昧になった。これには活動範囲が広い「一部登山家、ハイカーの間」で「奥武蔵」が認識されたことも関係するとみられる。



図5.1 「秋は武蔵野電車で」(外面)



図5.2 「秋は武蔵野電車で」(外面 内扉)



図5.3 「奥武蔵ハイキング 正丸峠ドライブウエー」(外面)

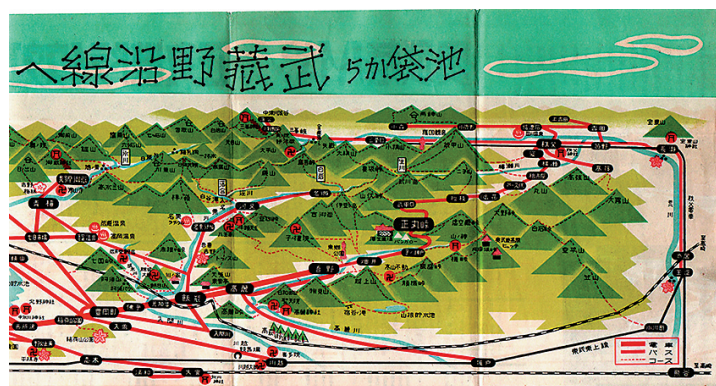


図5.4 「奥武蔵ハイキング 正丸峠ドライブウエー」(内面 部分)



図5.5 「祖国の史を訪ねて ハイキング 健康と鍛錬 東上線 池袋から」(外面)

9 武蔵野電車「秋は武蔵野電車で」参照。

10 武蔵野電車「奥武蔵ハイキング 正丸峠ドライブウエー」参照。

11 武蔵野を探る会会報（1936）「開かれた“文化の障壁” 正丸峠開通祝賀会」『むさしあぶみ』（27）参照。

12 「祖国の史を訪ねて ハイキング 健康と鍛錬 東上線 池袋から」参照。

戦後まもなくの例として、昭和21年（1946年）発行の坂倉登喜子『奥武蔵』は付図として「奥武蔵概念図」を収録し、「奥武蔵概説」に次のように記述している。

「其の山域は南面を奥多摩に隣接し、武甲山を界して秩父に至り、北面比企山系は上武国境に迄波及し、東面は緩かに関東平野、武蔵野の原に、流れ流れて高度を減じ…」

「一部登山家、ハイカーの間」の認識とは別に、「奥武蔵」の語句は、昭和25年（1950年）12月に、飯能町・原市場村・名栗村・高麗村・東吾野村・吾野村から「飯能地方自然観光地指定に関する陳情書」が埼玉県に陳情され、昭和26年（1951年）3月9日に「埼玉県立奥武蔵自然公園」に指定されたことで行政上の語句となった<sup>13,14</sup>。「埼玉県立奥武蔵自然公園」の範囲は西武鉄道沿線の山という狭義の奥武蔵だったが、これによって行政的には自然公園として「奥武蔵」の範囲が明確になったといえる。自然公園の認定陳情は関連自治体への西武鉄道の働きかけがあったのではないかと推察されるが、判然としない。

「埼玉県立奥武蔵自然公園」が指定されたことが西武鉄道沿線の山をすなわち「奥武蔵」の範囲にしたとはいえ、「奥武蔵」は一般的に通じにくく地域もイメージしにくい語句であったようだ。

指定から5年後の昭和30年（1955年）発行の有竹修二『武蔵野散歩』の「奥武蔵」に、次のように記述されている。

#### 「奥武蔵

「奥武蔵」という詞はまだ一般には通じにくいだが、一部登山家、ハイカーの間には、すでに立派に通用語になっている。殊に秩父山系中心の山々や、その山裾の村落を歩く人々の集まりとして、「奥武蔵研究会」という会が出来ている。この大石真人氏の著書「奥武蔵」は奥武蔵を明快に解説しこの地域の数々の山路のハイキングコースや山ひだにある山村聚落の習俗についてのルポルタージュを集めている。…「奥武蔵」と呼ばれる地域は、大石氏自らの定義によると、南は、東京と埼玉の県境の尾根、金子丘陵付近から天目山（1,717米）で奥多摩と連なり、西は天目山から熊倉山にいたる尾根で奥秩父に接し、その延長は荒川でつき、北上して東へ廻り北縁となり、東西は陵夷して入間野台地にいたる。これが広義の奥武蔵で、狭義の奥武蔵は、越生から都幾川の谷を登り、高篠峠から高篠川に下る線以南を指す。概別すると、狭義の部分を西武鉄道沿線の山。残余を東上線沿線の山ということが出来る。大石氏はこの二部分を別けて前者を「奥武蔵」後者を「外秩父」と呼ぶ。しかもこの大石氏の分類は次第に普及しているそうである。」

## 6. 結び

本稿は活用できる資料に限りがあるなかでの帰納的な考察であり、その限界のうえで以下のように

---

13 埼玉県「埼玉県の自然公園」参照。

14 「初の県立自然公園－名称・地域決まる－」『飯能町メガホン』1951年3月15日参照。

まとめたい。

「奥武蔵」の語句は、武蔵野鉄道の観光施策で使われたことに始まる観光用の造語である。語源は武蔵野鉄道の名に由来し、その終着という意味であろう。吾野線の開業とともに、「奥武蔵野」が表す飯能駅周辺地域から「奥武蔵」で表される吾野周辺地域へと「奥」が移ったことがその傍証である。

「奥武蔵」の語句の創出は、昭和4年（1929年）吾野線の開業後である。飯能町の観光地を「奥武蔵野」と表現した時期があったが、昭和9年（1934年）の「奥武蔵スキー場」開業ころには吾野周辺を表す語句として「奥武蔵」が武蔵野鉄道によって成立していた。

「奥武蔵」の語句は昭和30年代初頭ころでも一般化していなかったものの、登山家やハイカーの間では戦前から広まっていた。「奥武蔵」は吾野線開通によって創出された語句であることからその沿線を狭義の「奥武蔵」とすれば、登山家やハイカーの間の「奥武蔵」は現在よりも広域で武蔵野鉄道沿線と東武東上線沿線、さらに秩父も含んでいた。その原因には、武蔵野鉄道の自社バスの運行による秩父への観光誘導と東武鉄道との連携が関係していたとみられる。

昭和26年（1951年）3月9日「埼玉県立奥武蔵自然公園」指定域は、西武電車沿線の山々を指す狭義の「奥武蔵」の範囲であったが、これによって「奥武蔵」は埼玉県の自然公園として認定された。

昭和20年代半ばから顕在化する西武鉄道と協調した飯能町の観光地化施策とともに、西武電車沿線の山々が「奥武蔵」として一般的に認識されていったとみられる。昭和31年（1956年）9月30日には吾野・東吾野・原市場の3村が飯能市と合併し<sup>15</sup>西武吾野線沿線を市域で包括したことも、西武鉄道と協調した「奥武蔵」の認知に好影響を与えたと推測される。

一方、東武東上線沿線の山間部は「埼玉県立奥武蔵自然公園」に含まれず、東武鉄道の観光地「外秩父」として分離する。秩父も「埼玉県立奥武蔵自然公園」に含まれなかった。これら「奥武蔵」の認知については本稿の外としたい。

ところで、「奥武蔵」の語句は地名でないことから、地元では地域を統合する用語として見出せる。例えば昭和27年（1952年）に第1回が開催された「奥武蔵駅伝競走大会」は、飯能町～高麗村～東吾野村～吾野村を通過する大会であった<sup>16</sup>。また、本稿「1. 「奥武蔵」の語句の現状」で触れた「奥武蔵創造学園 飯能市立奥武蔵小学校」も小学校3校を統合した校名である。「奥武蔵」の語句の地元定着については、あらためて考察する必要があるだろう。

- ・本文中は「～年代」を除き引用を含めて元号と西暦を併記し、数字は固有名詞を除きアラビア数字に置き換えた。
- ・観光案内パンフレット類は同名で異なるものが少なくないため、タイトルと画像を併記した。

15 飯能市史編集委員会（1988）『飯能市史 通史編』参照。

16 飯能市体育協会・飯能陸上競技協会（2001）『道はつづく 奥武蔵駅伝競走大会50周年記念誌』参照。

## 参考文献

- (1) 浅見徳男 (2009) 『飯能の住民が燃えた時－武蔵野鉄道と観光開発－』文化新聞社, pp.73－74.
- (2) 飯能市史編集委員会 (1986) 『飯能市史資料編Ⅺ 地名・姓氏』飯能市.
- (3) 埼玉県「埼玉県の自然公園」埼玉県ホームページ  
(<https://www.pref.saitama.lg.jp/a0508/shizenkouen/midorishizenka.html>, 2020年11月22日閲覧).
- (4) 飯能市教育委員会 (2018) 「奥武蔵創造学園奥武蔵小学校・奥武蔵中学校設置に係る基本方針」平成30年7月  
(平成30年10月一部改正).
- (5) 岳朋会 (1969) 『奥武蔵』(山と高原地図シリーズ25) 昭文社, p.2.
- (6) 坂倉登喜子 (1964) 「奥武蔵からヒマラヤへ」『新ハイキング』(109), p.20.
- (7) 神山弘・新井良輔 (1984) 『増補ものがたり奥武蔵 伝説探訪二人旅』金曜堂出版部, pp.182－183, 252－253.
- (8) 岩崎京二郎 (1964) 「奥武蔵の範囲」『奥武蔵研究会「奥武蔵」十五周年(100号)記念号』(100), p.15.
- (9) 「山郷雑記」『文化新聞』1952年2月28日.
- (10) 山田勇雄 (1915) 『武蔵野鉄道案内』大日本交通協会出版部, p.73.
- (11) 武蔵野電車「奥武蔵野 遊覧コース御案内」.
- (12) 飯能市立図書館蔵「八高線・武蔵野鉄道資料」(コピー資料).
- (13) 地図(1932－1933と推定)「消火栓之位置」.
- (14) 武蔵野電車「飯能 天覧山」.
- (15) 飯能市郷土館 (2015) 『西武鉄道飯能池袋間開通100周年記念特別展武蔵野鉄道開通』飯能市郷土館.
- (16) 武蔵野電車「奥武蔵の雄 伊豆ヶ岳 奥武蔵の峠」.
- (17) 大石真人 (1999) 「研究会五十周年を祝う」『「奥武蔵」奥武蔵研究会創立五十周年記念号』(310), p.2.
- (18) 西武電車 (1962) 「奥武蔵ハイキング」('62年版(37年2月)).
- (19) 武蔵野電車「秋は武蔵野電車で」.
- (20) 武蔵野電車「奥武蔵ハイキング 正丸峠ドライブウエー」.
- (21) 武蔵野を探る会会報 (1936) 「開かれた“文化の障壁” 正丸峠開通祝賀会」『むさしあぶみ』(27).
- (22) 「祖国の史を訪ねて ハイキング 健康と鍛錬 東上線 池袋から」.  
社名はないが東武鉄道製作と推定. 連絡バスの案内から, 東武鉄道と武蔵野電車が協力したパンフレットである.
- (23) 坂倉登喜子 (1946) 『奥武蔵』山と溪谷社, pp.4－5.
- (24) 「初の県立自然公園－名称・地域決まる－」『飯能町メガホン』1951年3月15日.
- (25) 有竹修二 (1955) 『武蔵野散歩』奥武蔵研究会, p.6.
- (26) 飯能市史編集委員会 (1988) 『飯能市史 通史編』飯能市, p.420.
- (27) 飯能市体育協会・飯能陸上競技協会 (2001) 『道はつづく 奥武蔵駅伝競走大会50周年記念誌』飯能市体育協会・飯能陸上競技協会, p.24.

## Birth of “OKUMUSASHI”

KATOH Hiroyuki

### Abstract

The name “OKUMUSASHI” is presumed to have been created by MUSASHINO Railway. In the early days, HANNO area was called “OKUMUSASHINO”. When MUSASHINO Railway extended to AGANO, “OKUMUSASHI” changed from HANNO area to AGANO area. And the bus service to CHICHIBU expanded the area of “OKUMUSASHI”. Mountaineers and hikers have expanded the area of “OKUMUSASHI” to include mountains along TOBU-TOJO Line. In 1951, “SAITAMA Prefectural OKUMUSASHI Nature Park” was established. The area of “OKUMUSASHI” was limited to the area along SEIBU Railway.

Key words : OKUMUSASHI, MUSASHINO Railway, SEIBU Railway, HANNO, AGANO



【論文】

## 越生町の固有品種「べに梅」果実の科学的特徴

飯塚 讓\*<sup>1</sup>、金 賢珠\*<sup>2</sup>、松本 明世、君羅 好史、清水 純、真野 博  
城西大学薬学部医療栄養学科

キーワード：べに梅、機能性成分、 $\beta$ -カロテン、クリプトキサンチン、クエン酸

### 1. 背景および目的

ウメ (*Prunus mume* Sieb. et Zucc.) は、バラ科サクラ属スモモ亜属に分類される樹木で、日本を含めた東アジア地域で広く栽培されている。ウメ果実は、豊かな芳香と味を有することから、我が国では明治時代以降、食用として需要が高まり、ジュースや梅酒といった嗜好飲料、長期保存が可能な梅干しとして食されてきた。

これまでに、ウメ果実の機能性に関わる研究が盛んにおこなわれてきた。その主な機能性成分として、有機酸の一種であるクエン酸<sup>(1)</sup>、糖アルコールであるソルビトール<sup>(2)</sup>、ヒドロキシ桂皮酸と呼ばれるポリフェノール類およびその誘導体<sup>(3)</sup> が明らかになっている。特に、クエン酸については、血流改善効果<sup>(4)</sup>、運動時の脂肪燃焼促進効果<sup>(5)</sup>、運動後の血中乳酸値の低下効果<sup>(1)</sup>、カルシウムの吸収促進効果<sup>(6)</sup> が報告されている。しかし、その果実における含量は品種、熟度、栽培要因によって変化する。一般的に、成熟が進むとクエン酸含量が増加し、リンゴ酸含量が減少することが知られている<sup>(7)</sup>。ウメに含まれるポリフェノール類は抗酸化作用を有することが明らかになっているが、和歌山県における主力品種である「南高」果実においては、紅色着色が強い程ポリフェノール類の含量が増加し、熟度が進むとポリフェノール由来の抗酸化能力が減少することも報告されている<sup>(7)</sup>。このように、ウメの機能性を評価する場合は、様々な要因が関与してくることを考慮する必要があると考えられる。

我が国のウメの生産状況は、平成29 (2017) 年度の農林水産省の発表<sup>(8)</sup> によると、収穫量、出荷量ともに和歌山県、群馬県、奈良県、長野県、三重県の順で多く、「南高」、「白加賀」、「林州」、「竜峡小梅」といった様々な品種が栽培されている。埼玉県においては、「白加賀」の生産が盛んであり、越生町は県内随一の産地として知られている<sup>(9)</sup>。一方、越生町の固有品種である「べに梅」は、果実の皮が薄く果肉が厚いことから、梅干しとして加工しやすいという特徴がある。しかし、全国的に多く生産されている他品種のウメと比較すると、「べに梅」に関する報告はほとんど無く、機能性成分をはじめとする含有成分については明らかになっていない。

そこで、本稿では「べに梅」の緑梅および黄梅果実の成分分析をおこない、これまで報告されている他品種に含まれる成分値と比較することで、「べに梅」の特徴および機能性について明らかにする

\* 1 現 淑徳大学看護栄養学部栄養学科

\* 2 現 帝京平成大学健康メディカル学部健康栄養学科

ことを目的とした。

## 2. 方法

越生町産「べに梅」の緑梅および黄梅果実の核を除去し、酵素処理をおこなった後、グラインダー（石臼）でペースト化したものを成分分析に供した。平成29（2017）年度産のべに梅果実は、埼玉県越生町 山口農園から供与された。また、緑梅（青梅）と黄梅の選別は生産者である山口由美氏による判断に委ねた。各梅のペースト化は有限会社リバティハウスに委託した。分析項目は、水分、たんぱく質、脂質、灰分、炭水化物、糖質、食物繊維（水溶性、不溶性）、エネルギー、ナトリウム、食塩相当量、ビタミンA（レチノール活性当量）、 $\alpha$ -カロテン、 $\beta$ -カロテン、クリプトンキサンチン、クエン酸、リンゴ酸、アミグダリン、ソルビトール、DPPHラジカル消去活性とし、すべての成分分析を一般財団法人日本食品分析センターに委託した。

## 3. 結果および考察

「べに梅」の緑梅および黄梅に含まれる各成分をTable 1に示した。水分、たんぱく質、脂質、灰分、炭水化物、エネルギー、ナトリウムは、緑梅と黄梅ともに、成分表に記載されている青梅の値と同程度であった。

一方、成分表の値と比較して、「べに梅」の緑梅には、ビタミンA（レチノール活性当量）は1.6倍、 $\alpha$ -カロテンは4.1倍、 $\beta$ -カロテンは1.6倍多く含まれていることが示された。また、ビタミンA（レチノール活性当量）、 $\beta$ -カロテン、クリプトンキサンチンは、緑梅と比べて黄梅において2倍以上多く含まれており、 $\beta$ -カロテンを多く含む品種である「地蔵」には劣るものの、その他の品種と比較すると「べに梅」の $\beta$ -カロテン含有量は高いことが示された。また、「南高」の $\beta$ -カロテンの含有量は、青果と比べて完熟果において高いことが報告されており、「べに梅」も同様の傾向を示した<sup>(10)</sup>。これらの所見から、「べに梅」の特徴の1つとして、青梅の状態においても $\beta$ -カロテンおよびクリプトンキサンチンが比較的多く含まれており、その含有量は一般的なウメと同様に、成熟に伴って増加すると考えられる。

$\beta$ -カロテンおよびウメ由来のポリフェノールは、抗酸化作用および抗炎症作用を有することが報告されている<sup>(11)</sup>。また、クリプトンキサンチンは、柑橘類に多く含まれるカロテノイドの1種であり、 $\beta$ -カロテンと同様に体内でレチノールに変換されてビタミンAの補給源として働くことが知られている<sup>(12)</sup>。さらに、リコピン、 $\beta$ -カロテンといった他のカロテノイドには劣るものの、抗酸化作用を有することも報告されている<sup>(13)</sup>。したがって、これらの機能性成分は、酸化ストレスによって引き起こされる生活習慣病を予防できることが期待される。

有機酸の分析結果から、「べに梅」のクエン酸含有量は比較的高い一方で、リンゴ酸の含有量は低いことが明らかになり、「兎玉」、「二青梅」、「薬師」といった品種と同じ傾向を示した。大江らは、5月20日～6月10日に採取した異なる品種の普通ウメに対して有機酸含有量を測定し、収穫時期が遅い品種ほどクエン酸の含有量が高いことを報告している<sup>(14)</sup>。今回の分析により、成熟が進んだ黄梅

のクエン酸含量は緑梅と比較して高値であったことから、「べに梅」も他品種と同様に、収穫時期がクエン酸含有量に影響を及ぼすことが示唆された。これまで、「べに梅」の機能性に関する研究はおこなわれていない。しかしながら、クエン酸の摂取は、運動後の血中乳酸値の低下効果<sup>(1)</sup> および脂肪燃焼促進効果<sup>(5)</sup> により、運動による肥満・生活習慣病の予防に対して効果的に作用することが期待される。さらに、血流改善効果<sup>(4)</sup>、カルシウムの吸収促進効果<sup>(6)</sup> といった他の有効性も報告されていることから、クエン酸を多く含む「べに梅」の摂取が、同様の機能性を示す可能性は高いことが考えられる。

ソルビトールは、整腸作用を有する糖アルコールの一種であり、多くの品種のウメに含まれることが明らかになっている。大江らは、ウメの採取日とソルビトール含量について評価をおこない、採取日が進むごとにソルビトール含量が高まる品種として「加賀地蔵」と「紅サシ」、減少する品種として「薬師」と「地蔵」、大きな変化が認められなかった品種として「児玉」と「谷口紅」を挙げている<sup>(14)</sup>。本調査では、緑梅と比較して黄梅のソルビトール含量は低値を示した。また、Table 1 に示した品種間でウメ100g中のソルビトール含量を比較すると、「べに梅」は青梅、黄梅ともにすべての品種の中で最も低値であった。これらの結果から、「べに梅」はソルビトール含量が比較的少なく、成熟が進むごとに含量が低下する品種であることが明らかになった。

一方で、ウメを含むバラ科サクラ属植物の未熟果実には、青酸配糖体であるアミグダリンが含まれており、その大部分は種子中の仁に存在し、微量ではあるが果実の果肉、葉、樹皮にも認められている<sup>(15)</sup>。アミグダリンは、動物の腸内細菌の $\beta$ -グルコシダーゼにより、有害成分であるシアン化水素に分解されることが知られている。しかし、今回の「べに梅」の成分分析では、緑梅、黄梅のアミグダリン含有量は、検出限界値である0.01g/100gを下回っていた。ヒトにおけるアミグダリンの経口致死量は50mg/kgとされていることから<sup>(16)</sup>、日常的な「べに梅」果実の生食摂取により、アミグダリンの健康被害が起こる可能性は極めて低いと考えられる。

本調査により、「べに梅」に含まれる $\beta$ -カロテンおよびクリプトキサンチンは、成熟が進むことで増加し、黄梅におけるこれらの含有量は他の品種を大きく上回ることが明らかになった。特に $\beta$ -カロテンは、日本食品標準成分表2015年版（七訂）に記載されている生の果物類において、露地メロン（赤肉種）3600 $\mu$ g/100g、あんず1400 $\mu$ g/100g、すいか（赤肉種）830 $\mu$ g/100gに次いで含有量が多く、供給源として優れた果物であると考えられる。以上の特徴から、「べに梅」は他の品種のウメと比べて、 $\beta$ -カロテンおよびクリプトキサンチンによる機能性が高いことが推察される。本調査では「べに梅」の機能性成分に関する詳細な解析はおこなっていないため、私達の生活に対する「べに梅」の有益性を明らかにするためには、機能性に関する多くのデータの蓄積が必要になると考えられる。さらに、機能性成分が増加する収穫時期および栽培法の調査など、「べに梅」の品質向上に向けた研究が進展していくことが望まれる。

## 4. 謝辞

本調査研究における研究経費の一部は、地域連携研究を目的とした一般財団法人リモート・センシング技術センターからの寄付研究費および越生町産業観光課 平成29年度補正予算を充当させていた

できました。また、べに梅果実を供与していただいた山口農園代表 山口由美氏に感謝いたします。

## 参考文献

- (1) 三宅義明, 山本兼史, 長崎大, 中井直也, 村上太郎, 下村吉治 (2001) 「ヒトにおけるレモン果汁およびクエン酸摂取が運動後の血中乳酸濃度に及ぼす影響」『日本栄養・食糧学会誌』54 (1), 29-33.
- (2) 矢野昌光 (1999) 「果実類の生理機能」『農及園』74, 113-118.
- (3) 三谷隆彦, 矢野史子 (2006) ウメとプラム. 近畿大先端技総研紀要 11, 1-13.
- (4) 西堀すき江 (2001) 「クエン酸と血流改善について」『ビタミン広報センター』104.
- (5) 梅井凡子, 堂本時夫, 平光正典, 片桐孝夫, 佐藤公子, 三宅由希子, 加藤洋司, 青井聡美, 石原克英, 池田ひろみ, 瀧川厚, 原田俊英 (2014) 「血中クエン酸濃度と歩数および生活習慣病関連指標との関係」『理学療法科学』29 (1), 97-100.
- (6) 堂本時夫 (2013) 「レモンの健康効果に関する研究の動向」『人間と科学 県立広島大学保健福祉学部誌』13 (1), 1-9.
- (7) 大江孝明, 桑原あき, 根来圭一, 山田知史, 菅井晴雄 (2006) 「ウメ ‘南高’ の開花時期, 採取時期と果実成分の関係およびそれらを原料として製造した梅酒品質への影響」『園芸学研究』5 (2), 141-148.
- (8) 農林水産省公開資料 農林水産統計 (2017) 『平成29年産びわ, おうとう, うめの結果樹面積, 収穫量及び出荷量』  
URL: [http://www.maff.go.jp/j/tokei/kouhyou/sakumotu/sakkyou\\_kazyu/attach/pdf/index-14.pdf](http://www.maff.go.jp/j/tokei/kouhyou/sakumotu/sakkyou_kazyu/attach/pdf/index-14.pdf)
- (9) 埼玉県ホームページ URL: <http://www.pref.saitama.lg.jp/a0904/909-20091203-61.html>
- (10) 田中敬一, 朝倉利員, 村松昇 (2001) 「核果類果実に含まれている機能性成分に関する研究: 1. ウメ, アンズ, ネクタリンに含まれているカロテン含量の品種間差異」『園芸学会雑誌. 別冊, 園芸学会大会研究発表』70 (1), 172.
- (11) Kang H, Kim H (2017). Astaxanthin and  $\beta$ -carotene in Helicobacter pylori-induced Gastric Inflammation: A Mini-review on Action Mechanisms. *J Cancer Prev.* 22(2), 57-61.
- (12) 矢賀部隆史, 宮下達也, 吉田和敬, 稲熊隆博 (2013) 『『野菜と果物の色に宿るチカラ』野菜や果物に含まれるカロテノイドと疾病の予防, 改善』『日本薬理学雑誌』141 (5), 256-261.
- (13) Aizawa K, Iwasaki Y, Ouchi A, Inakuma T, Nagaoka S, Terao J, Mukai K (2011) Development of singlet oxygen absorption capacity (SOAC) assay method. 2. Measurements of the SOAC values for carotenoids and food extracts. *J Agric Food Chem.* 59(8), 3717-29.
- (14) 大江孝明, 林恭平, 桑原あき, 根来圭一 (2006) 「育種素材探索を目的としたウメ果実の品質成分および形質の品種間差異」『和歌山県農林水産総合技術センター研究報告』7, 55-61.
- (15) 大坪孝之, 池田富喜夫 (1994) 「ウメ種子に含まれる青酸配糖体の消長」『園芸学会雑誌』62 (4), 695-700.
- (16) 公益財団法人日本中毒情報センター 『保健師・薬剤師・看護師向け中毒情報【青梅】 ver. 1.00』

Table 1 ベに梅（緑梅および黄梅）の成分分析結果および他品種に含まれるβ-カロテンと有機酸

分析試験項目	100 g中	緑梅	黄梅	成分表*1	南高*2	白加賀*3	白加賀*4	古城*5	加賀地蔵*6	地蔵*7	見玉*8	林州*9	二青梅*10	薬師*11	竜岫小梅*12	甲州小梅*13
水分	g	90.6	90.5	90.4												
たんぱく質	g	0.6	0.6	0.7												
脂質	g	0.1	0.1	0.5												
灰分	g	0.5	0.4	0.5												
炭水化物	g	8.2	8.4	7.9												
糖質	g	6.5	7.2													
食物繊維	g	1.7	1.2													
エネルギー	kcal	28	30	28												
ナトリウム	mg	2.3	検出せず	2												
食塩相当量	g	0.0058	検出せず													
ビタミンA (レチノール活性当量)	μg	32	73	20												
α-カロテン	μg	29	34	7												
β-カロテン	μg	356	797	220	200	220	250	280	810	190	210	390	350	370		
クリプトキサンチン	μg	37	115	30												
食物繊維																
水溶性食物繊維	g	0.8	0.6	0.9												
不溶性食物繊維	g	0.7	0.6	1.6												
食物繊維総量	g	1.5	1.2	2.5												
クエン酸	g	3.32	3.91	3.08	0.89	1.9	2.0	2.7	3.4	4.4	3.5	4.9	4.9	3.8	3.79	
リンゴ酸	g	1.46	0.93	2.21	3.16	2.6	2.6	2.7	2.6	1.8	2.1	1.3	1.3	2.4	2.68	
アミグダリン	g	検出せず	検出せず													
ソルビトール	mg	100	60	140		160	167	363	653	207	221	601	381	174	302	
DPPHラジカル消去活性	μmol TE	300	200	465		563	600	592	411	670	698	613	612	511		

\*1 日本食品標準成分表2015年版（七訂）；未熟果（青梅）  
 \*2 南高（各値は採取日5月27日における最高値）大江ら、ウメ・南高の開花時期、採取時期と果実成分の関係およびそれを原料として製造した梅酒品質への影響、園芸学研究 5(2): 141-148 (2006)  
 \*3 白加賀 Food Sci. Technol. Int. Tokyo. 4: 59-65 (1998)  
 \*4 白加賀（着色率2%）、\*5 古城（着色率2%）、\*6 加賀地蔵（着色率2%）、\*7 地蔵（着色率1%）、\*8 見玉（着色率4%）、\*9 林州（着色率0%）、\*10 二王梅（着色率1%）、\*11 薬師（着色率2%）、\*12 竜岫小梅（着色率9%）大江ら、青種素材探索を目的としたウメ果実の品質成分および形質の品種間差異、和歌山県農林水産技術報 7: 55-61 (2006)  
 \*13 甲州小梅 Odake et al. Food Sci. Technol. Res. 5: 113-118 (1999)

## Characteristics of Beni ume: an endemic species to Japanese plum in Ogose town

IIZUKA Yuzuru, KIM Hyounju, MATSUMOTO Akiyo, KIMURA Yoshifumi,  
SHIMIZU Jun, MANO Hiroshi

Department of Clinical Dietetics & Human Nutrition, Faculty of Pharmaceutical Sciences,  
Josai University

### 【Abstract】

The aim of this study is to elucidate characteristics of Japanese plum “Beni ume”, an endemic species in Ogose town, Saitama. We conducted component analyses of immature and mature Beni ume in order to compare with component values of other species. Our results demonstrated that contents of  $\beta$ -carotene and cryptoxanthin in the Beni ume were increased by maturation, and those components of the mature Beni ume markedly exceeded other several species selected to the comparative investigation. Especially, the mature Beni ume contained a high  $\beta$ -carotene content similar to “Zizo” whose high  $\beta$ -carotene content was reported. Component analysis of organic acids showed that the Beni ume contained relatively large amounts of citric acid contrary to malic acid. In terms of food safety, amygdalin, one of cyanogenetic glycosides, was undetected in both of the immature and mature Beni ume. These findings suggested that  $\beta$ -carotene, cryptoxanthin, and citric acid might contribute to health-promoting effects of the Beni ume. However, we could not fully reveal the benefits of Beni ume as a functional food. Further studies are required to elucidate the efficacy of the Beni ume for health maintenance and promotion.

Key words : Beni ume, functional components,  $\beta$ -carotene, cryptoxanthin, citric acid

【地域教育実践報告】

# 埼玉県における地域住民の質の高い暮らしを目指した 専門職連携教育

——彩の国連携力育成プロジェクト (SAIPE)

古屋牧子\*・上田秀雄\*・白幡 晶\*・大嶋 繁\*・村田 勇\*・高尾浩一\*  
小糸寿美\*・堀由美子\*・水野文夫\*・岩田直洋\*・細谷 治\*\*・小林大介\*

## 1. はじめに

埼玉県は、2005年から2025年にかけての後期高齢者（75歳以上）の増加率が全国1位であり、2005年から2030年にかけての高齢者単独世帯の増加率も全国1位と推計されている<sup>(1),(2)</sup>。急速に超高齢社会を迎える埼玉県では、高度経済成長期に移り住んだ世代が多く、特に都市部において、地域とのつながりが希薄な高齢者の増加が見込まれ、さらに単身世帯や夫婦のみの世帯が増加することから、医療・介護への依存は増大することが予測される。一方、人口10万人当たりの病床数は全国46位、人口10万人当たりの医師数が全国最下位と、保健医療福祉領域における支援体制が十分とは言えない状況である<sup>(3)</sup>。このような地域社会の課題を解決するためには、多職種協働による一体的な支援体制の構築が不可欠であり、それらを担う人材の育成が重要である。

## 2. 彩の国連携力育成プロジェクトの概要

### 2.1 彩の国連携力育成プロジェクトの目標と特徴

彩の国連携力育成プロジェクト (SAIPE)<sup>(4)</sup> は、城西大学薬学部（薬学科、薬科学科、医療栄養学科）、埼玉県立大学保健医療福祉学部、埼玉医科大学医学部、日本工業大学建築学部建築学科生活環境デザインコースの4つの大学と埼玉県が連携して取り組んでいる専門職連携教育 (Interprofessional Education ; IPE<sup>1</sup>) である (図1)。2012 (平成24) 年度に、文部科学省大学間連携共同教育推進事業として採択され

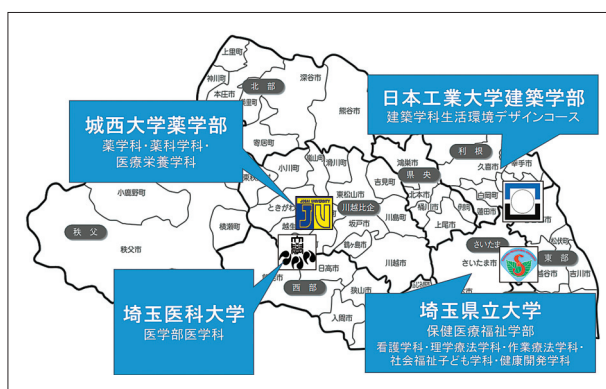


図1 彩の国連携力育成プロジェクトの連携校

\* 城西大学薬学部

\*\* 日本赤十字社医療センター 薬剤部長、城西大学薬学部 特任教授

1 IPE (Interprofessional Education ; 専門職連携教育) は、「複数の領域の専門職者が、連携およびケアの質を改善するために、同じ場所でもに学び、お互いから学びあいながら、お互いのことを学ぶこと」と定義されている<sup>(5)</sup>。

た「彩の国大学連携による住民の暮らしを支える連携力の高い専門職育成（通称、彩の国連携力育成プロジェクト：SAIPE）」（平成24～28年度）をきっかけに始まった取組である。

本プロジェクトでは、地域住民の質の高い暮らしを実現するために、地域住民の暮らしの課題を多職種との連携により発見・解決できる連携力の高い人材を育成することを目標としている。本プロジェクトの特徴の一つとして、保健医療福祉関連の3大学（埼玉県立大学保健医療福祉学部、埼玉医科大学医学部、城西大学薬学部）に、建築士や福祉住環境コーディネーターなどの住環境の専門家を目指す建築学部（日本工業大学建築学部）が加わり、専門職連携教育を進めていることが挙げられる。国内だけでなく海外でも珍しい取組であるが、本邦が目指す地域包括ケアシステムでは、住まいを中心として医療、介護、生活支援、介護予防が連携して取り組むことが地域に求められるようになってきていることから<sup>(6)</sup>、本プロジェクトは我が国の将来を見据えた取組であると考えられる。

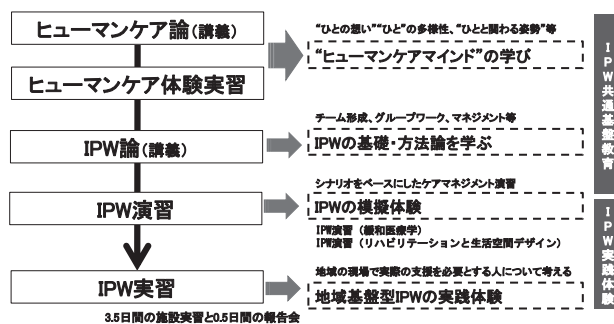


図2 彩の国大学連携科目

## 2.2 彩の国大学連携科目の共同開発・共同開講

本プロジェクトでは、各大学の状況を踏まえて試行を重ね、4大学で共同開講する科目を、彩の国大学連携科目（以下、連携科目）として基本の5科目に設定した（図2）。“IPW<sup>2</sup>共通基盤教育科目”として、「ヒューマンケア論」（ひとの心・多様性、ひとをケアする心を学ぶ）、「ヒューマンケア体験実習」（実践現場でのヒューマンケアの体験）および「IPW論」（IPWの方法論〈マネジメント、チーム形成方法〉を学ぶ）の3科目を設定し、“地域基盤IPW実践”として「IPW演習」（チーム形成、グループワーク、マネジメントの模擬的实践）および「IPW実習（チーム形成、グループワーク、マネジメントの地域基盤型実践）」を設定し、これら5科目をIPEのコアと位置づけ、連携科目として学年進行に伴い段階的に実施している。

## 2.3 連携科目における質保証に関する取組

本プロジェクトでは、共同開講を進める上での科目の質保証・向上のため「地域基盤型IPWのコンピテンシー」を作成した（図3）。本プロジェクトの目標が「地域住民の質の高い暮らしの実現」であることを踏まえ、5つのコンピテンシーとして「ヒューマンケアマインド」、「コミュニケーション能力」、「チームを形成し

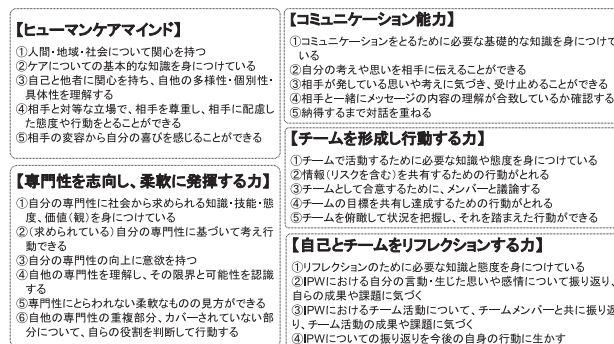


図3 地域基盤型IPWコンピテンシー

2 IPW（Interprofessional Work；専門職連携実践）とは、「複数の領域の専門職者（住民や当事者も含む）が、それぞれの技術と知識を提供しあい、相互に作用しつつ、共通の目標の達成を患者・利用者とともに目指す協働した活動のこと」と定義されている。



行動する力」、「専門性を志向し、柔軟に発揮する力」、「自己とチームをリフレクションする力」を設定した。これにより本プロジェクトで育成すべき人材像を明確にし、共通の教育目標や各科目に必須の教育内容（共通教材の作成等）を共有した。その上で客観的な「ルーブリック評価指標」を作成し、育成すべき人材像と照らし合わせた教育の評価を行うようにした。

### 3. IPW実習における城西大学薬学部生の学び

#### 3.1 城西大学薬学部生のIPW実習への参加実績

城西大学薬学部生のIPW実習への参加実績を表1に示した。現在のところ本学では単位化されておらず、任意での参加となっているが（他3大学は必修科目または選択科目）、毎年多くの学生から参加希望があり、希望者が多い場合には抽選としている。実施年度によって学科ごとの参加人数にばらつきはあるが、3学科の学生が参加している。また、本取組の開始当初から、城西大学薬学部3学科の教員が教員ファシリテータとして参加している。

表1 城西大学におけるIPW実習の実施状況

年度	参加学生(学科別)	参加学生数	教員ファシリテータ数
2015年度 (平成27年度)	薬学科4名 薬科学科3名 医療栄養学科12名	19名	4名
2016年度 (平成28年度)	薬学科5名 薬科学科1名 医療栄養学科16名	22名	4名
2017年度 (平成29年度)	薬学科9名 医療栄養学科11名	20名	7名
2018年度 (平成30年度)	薬学科7名 医療栄養学科13名	20名	7名
2019年度 (令和元年度)	薬学科3名 薬科学科2名 医療栄養学科15名	20名	7名
2020年度 (令和2年度)	薬科学科8名 医療栄養学科5名	13名	10名 (遠隔実施)

#### 3.2 IPW実習のプロセス

IPW実習は、保健医療福祉の実践現場に多職種混合チームで赴き、援助を必要とする人々や専門職へのインタビューを通して、地域でのよりよい生活のための提案をする課題に取り組む実習である。学生は、異なる分野（医師、看護師、薬剤師、管理栄養士、理学療法士、作業療法士、社会福祉士、歯科衛生士、臨床検査技師、薬科学技術者、建築士など）を学ぶ5～6名で1組のチームを作り、埼玉県内の病院、在宅診療所、介護老人保健施設、障害児施設、薬局等に出向き、患者・利用者などの支援を必要とする人や施設スタッフへのインタビューやカルテ調査等により情報収集および課題抽出を行い、ディスカッションを繰り返しながら支援計画を作成する（表2）。

それぞれの施設で援助を必要とする人や施設や地域で働く保健医療福祉に関わる人々との直接的な関わりを通じて、学生が連携するために必要な、利用者・集団・地域の理解と

表2 IPW実習の4日間の流れ

日	日時	内容
1日目	AM	・各施設に集合 ・施設ファシリテータ紹介 ・オリエンテーション(施設の見学、地域探索など) ・行動計画を施設ファシリテータと共に検討
	PM	・インタビュー・見学・カンファレンスへの参加 等 ・ディスカッション ・リフレクション
2日目	AM	・行動計画の修正
	PM	・インタビュー・見学・カンファレンスへの参加 等 ・個人学習 ・ディスカッション ・リフレクション
3日目	AM	・行動計画の修正
	PM	・インタビュー・見学・カンファレンスへの参加 等 ・個人学習 ・ディスカッション ・リフレクション
4日目	AM	・報告会会場に集合 ・報告内容のまとめと報告の準備・練習
	PM	・報告会 ・リフレクション

課題解決のプロセス、多領域の相互理解のプロセス、チーム形成のプロセスを体験する。さらに自分の体験やチーム活動についてリフレクション（ふりかえり）を行うことで、自らの課題やチームの課題を見出していく（図4）。

2020年度は新型コロナウイルス感染症流行の影響により施設での実習は困難だったため、ペーパーパイシメントを用いたZoomによる遠隔実施となった。



図4 IPW実習における学生の様子

### 3.3 IPW実習の教育効果

IPW実習の事前事後自己評価アンケートの質問項目を表3に示した。本アンケートは毎年継続的に実施されており、2019年度の実習においても良好な学修効果が認められている。なお、2020年度は新型コロナウイルス感染症流行の影響によりペーパーパイシメントを用いた遠隔実施となったことから、アンケート項目を一部変更して実施した。結果は概ね良好であったが、詳細については現在解析中である。

IPW実習に参加した学生からは、「医療現場においては、専門的な視点から患者様にアプローチしていく必要があることはもちろんだが、専門領域の壁を越えてフラットな関係で患者様にアプローチしていく必要があると感じた。」「自分の専門以外の視点からの意見を聞くことで、視野が広がり、新たな気付きを得ることができた。」「建築学部の学生がいることで、医療系とは違った視点から住環境についての意見が出て、対象者の生活への理解が深まった。同じ大学だけだったら医療・福祉の型にはまった考え方しかできなかつたと思う。」「患者だけでなく、他の職種に対してもどんな人なのか、しっかり1人の“ひと”として見ることが重要だと感じた。」などの多くの意見が聴かれており、この実習の成果を裏付けている。

IPW実習は、県内の多くの施設や地域の人々が密接に関わる地域基盤型実習であり、4大学の学生が目指すそれぞれの専門領域で必要とされる“連携力”の実践的育成に効果的であると考えられる。また、建築学部の存在により、医療系専門職だけの連携教育に比べ、「住まい」を基盤とした、より

表3 IPW実習事前事後アンケートの質問項目

事前・事後評価	
設問1	利用者理解のための情報の内容を共有することができる。
設問2	利用者の思い（ニーズ、願い、ゴール、ホープなど）を共有することができる。
設問3	利用者の状況をメンバーと一緒にアセスメントすることができる。
設問4	利用者が置かれた環境について共有することができる。
設問5	利用者、メンバーの合意のもとに目標を設定することができる。
設問6	メンバーの考えや違いについて表現することができる。
設問7	これまでに学んだことを活かして意見を述べるすることができる。
設問8	メンバーの考えの共通性について表現することができる。
設問9	他領域の特性（役割・機能・知識・技術など）を活用することができる。
設問10	自分の考えをメンバーにわかるように伝えることができる。
設問11	メンバーを尊重する態度をとることができる。
設問12	メンバーの考えを理解しようと努めることができる。
設問13	チーム活動に積極的に参加することができる。
設問14	チームで決めたルールを守ることができる。
設問15	場面に応じてリーダーシップやメンバーシップの役割をとることができる。
設問16	メンバー同士が理解しあえるように調整することができる。
設問17	チーム活動を促進するような発言ができる。
事後評価のみ	
設問18	自分で自分の体験をリフレクションすることができた。
設問19	他者との関わりを通して自分の可能性に気づくことができた。
設問20	自分でチームのプロセスをリフレクションすることができた。
設問21	葛藤を認識することができた。
設問22	困難を認識することができた。
設問23	違和感を認識することができた。
設問24	葛藤を表現することができた。
設問25	困難を表現することができた。
設問26	違和感を表現することができた。
設問27	葛藤に対処することができた。
設問28	困難に対処することができた。
設問29	違和感に対処することができた。
設問30	他大学学生が参加したグループは他大学学生の参加によってどうだったか。（自由記載）
設問31	実習施設に通うために、公共交通機関を利用しましたか。
設問32	本実習に対する要望をお書きください。（自由記載）

“生活”を意識した地域住民（生活者）の視点からの議論が可能となる。さらに、建築学部の学生には医療系専門職の共通言語を理解するための葛藤が生まれ、医療系の学生には生活者からの視点を理解するための葛藤が生まれ、お互いを理解するための“葛藤を乗り越えたチーム形成のプロセス”をも体験できるようになった。これらの効果は本プロジェクトのIPW実習の特筆すべき特徴である。

#### 4. 地域で活躍する現職者との連携

連携力は、学生だけでなく現職者にとっても必要不可欠な能力であり、本プロジェクトで開発した教育プログラムは現職者の連携力育成にも応用が可能であると考え、2018年度より、緩和ケアを題材としたIPW演習を現職者向けの研修会として年1回実施している。

この研修会は、埼玉県内に勤務している医療職種（医師、歯科医師、薬剤師、看護師、管理栄養士、理学療法士、ケアマネジャーなど）が、終末期の症例（模擬症例）を課題として多職種混合チームで行う演習である（図5）。毎回30～40名を対象



図5 緩和IPW研修会の様子  
上：2019年度、下は2020年度（遠隔実施）

として実施しており、高い評価が得られている。2020年度は新型コロナウイルス感染症流行によりZoomを用いた遠隔実施とした（図5下）。ペーパーペーシェントではなく、遠隔で模擬患者へのインタビューを実施したことにより、例年とほぼ変わりなく患者理解を深めることができたことがアンケート結果から示唆された。

本プロジェクトでは、2018年度より年2回のペースで埼玉県内の様々な職能団体との意見交換会を開催しており、今後も学部学生に対する連携教育と現職者に対する連携教育をシームレスに実施していきたいと考えている。

#### 5. 彩の国連携力育成プロジェクトの評価と将来展望

2012年度から5年間、文科省の「大学間連携共同教育推進事業」として実施してきた彩の国連携力育成プロジェクトは、事業期間終了後の事後評価で『S』評価を受けた（S：計画を超えた取組が行われ、優れた成果が得られていることから、本事業の目的を十分に達成できたと評価できる）。高評価を得たのは、教育システムの構築のみならず、IPW実習受け入れ施設等との連携・実施体制が確立したことも大きく影響したと思われる。また本プロジェクトは、一般社団法人薬学教育評価機構による2019年度「薬学教育第三者評価」において、城西大学薬学部薬学科（6年制）の特色となる優れた教育プログラムとして高く評価されている。さらには、文部科学省「平成元年度私立大学等改革相互

支援事業（タイプ3）」に選定された埼玉東上地域大学教育プラットフォーム（TJUP）における連携教育の基礎ともなっている。

今後は本プロジェクトとして、連携科目のテキストやファシリテータガイド、さらには指導要領を整備・作成することで、教育の質の担保が可能となり、他地域や他領域への展開が可能になると考えている。また、教育の質保証・向上のための効果検証に関する研究なども協働して継続的に実施していきたいと考えている。

## 参考文献

- (1) 埼玉県（2020）『第2期埼玉県まち・ひと・しごと創生総合戦略（令和2～6年度）』  
([https://www.pref.saitama.lg.jp/a0102/documents/dainikisougousenryaku\\_bunkatu1.pdf](https://www.pref.saitama.lg.jp/a0102/documents/dainikisougousenryaku_bunkatu1.pdf))（2021年2月1日）
- (2) 埼玉県（2020）『統計からみた埼玉県のすがた2020』  
(<https://www.pref.saitama.lg.jp/a0206/a360/documents/sugata2020all1.pdf>)（2021年2月1日）
- (3) 埼玉県（2020）『統計からみた埼玉縣市町村のすがた2020』  
(<https://www.pref.saitama.lg.jp/a0206/shicyosonnosugata2020.html>)（2021年2月1日）
- (4) 柴崎智美, 米岡裕美, 古屋牧子（2019）『保健・医療・福祉のための専門職連携教育プログラム－地域包括ケアを担うためのヒント－』ミネルヴァ書房.
- (5) 埼玉県立大学編集（2009）『IPWを学ぶ利用者中心の保健医療福祉連携』中央法規.
- (6) 厚生労働省『地域包括ケアシステム』  
([https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi\\_kaigo/kaigo\\_koureisha/chiiki-houkatsu/](https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/kaigo_koureisha/chiiki-houkatsu/))  
(2021年2月1日)

【地域教育実践報告】

## 小川町にぎわい創出課との連携による地域教育

——留学生対象「日本文化研修Ⅰ」における学外授業——

村越純子\*

### 1. はじめに

内閣府地方創生推進事務局による都市再生プロジェクトでは、2005年（平成17年12月）に「大学と地域の連携協働による都市再生の推進」（第10次決定）が掲げられた。これは大学と地域の双方が好循環の関係を形成し、活力の源である人材の育成と創意工夫によって都市の再生を推進するという取り組みである。このプロジェクトは5つの項目から構成されており、その1つには、「留学生・外国人研究者等のための環境整備や市民とのふれあい・交流促進」が含まれている<sup>1</sup>。

この「市民とのふれあい・交流」の場となる「地域」との連携を推進するために、すでに城西大学・城西短期大学地域連携センターが設置されている。本学の「地域との連携で目指すもの」とは以下の4つである。①大学での「学び」を通じた「地域」に貢献し得る能力と人間性を合わせ持つ人材の育成、②大学の「教育・研究」を通じた「地域」の実際的な課題の解決、③地域連携及び地域資源を活用した「教育・研究プログラム」の実施、④世界のどこにいても「地域」に対する意識を持って生きていく「地域志向」と「国際性」との融合、である<sup>2</sup>。

大学と地域との連携が求められているなか、本稿は、上述した本学の「地域との連携で目指すもの」のうち、③および④の実現、すなわち、地域連携のための留学生「教育プログラム」の実践例として城西短期大学開講科目「日本文化研修Ⅰ」の2020年度における教育内容を報告する。城西短期大学では、日本人を対象とした「日本文化研修Ⅰ」と留学生を対象としたものに分けられている。本稿で紹介するのは後者を対象とした集中授業形式でおこなわれた「日本文化研修Ⅰ」の内容である。

2020年度には新型コロナウイルス感染症拡大にともない、前期の授業は本学においても対面方式からオンライン方式に変更された。前期だけでなく後期でも、新型コロナウイルス感染症の拡大が心配されたが、幸いなことに埼玉県内の小川町にぎわい創出課の支援を得て、感染症対策を十分にとった

---

\* 城西短期大学・准教授

1 内閣府地方創生推進事務局、平成17年12月6日第15回議事次第 資料1「都市再生プロジェクト（第十次決定）大学と地域の連携協働による都市再生の推進」には以下の5つの内容が示されている。「1. 大学と地域との連携の強化によるまちづくりの取組の推進、2. 実践的な社会人教育の推進や社会活動への参加促進、3. 留学生・外国人研究者等のための環境整備や市民とのふれあい・交流促進、4. 市民に開かれた大学、連続した緑地の確保などまちづくりと調和した大学キャンパスの形成、5. まちづくりへの取組に当たっての大学と地域との連携を促進するための体制整備」

内閣府地方創生推進事務局

(<https://www.kantei.go.jp/jp/singi/tiiki/toshisaisei/dai15/15gijisidai.html>)（最終閲覧日2021年1月31日）

2 城西大学・城西短期大学地域連携センター「地域との連携で目指すもの」

([https://www.josai.ac.jp/lifelong/medical\\_welfare.html](https://www.josai.ac.jp/lifelong/medical_welfare.html))（最終閲覧日2021年1月31日）

うえで学外授業を実施することができた。

以下では、まず「日本文化研修Ⅰ」で実施された体験型学習の目的と経緯を説明する。次に小川町でおこなった紙漉き体験や町歩き体験などの体験型学習の具体的内容について述べる。あわせて、学外授業のための事前学習として学内でおこなった授業内容と、学外授業における体験型学習の成果を示す。最後に、これらをふまえて大学と地域が連携することによって可能となる教育成果をまとめる。

## 2. 集中講義科目「日本文化研修Ⅰ」の概要

### 2.1 「日本文化研修Ⅰ」の目的

筆者が留学生を対象とした集中講義科目「日本文化研修」を担当するようになったのは2017年度後期からである。当時の「日本文化研修」は1年次配当の半期科目であった。城西短期大学に在籍する留学生に坂戸キャンパスを取り巻く地域で体験型学習をさせることによって、日本文化の理解を深化させることをめざしたものであった。

小学校から高等学校まで「特別活動」として実施される遠足や学校給食などは、日本人にとって「集団活動」の訓練の場でもある<sup>3</sup>。訓練を受けてきた日本人とは異なり、「集団活動」は留学生にとって必ずしも当たり前のことではない。留学生を対象とした体験型学習の実施に際しては、この点に留意する必要がある。同時に、この点が留学生の「日本文化」理解を助けるのではないかと考えた。そこで、望ましい「集団活動」（「特別活動」について学習指導要領のなかで指摘される学習内容）の意味するところが理解できる機会となるよう計画した。また、日本の教育基本法に示された人間観や、それに基づく学校における「道德教育」の意味や目的を理解することは留学生にとって「日本文化」の理解につながると考えた<sup>4</sup>。

2018年度からは「日本文化研修」を充実させ、前期の「日本文化研修Ⅰ」、後期の「日本文化研修Ⅱ」とした<sup>5</sup>。それに応じて地域の文化財や地場産業を理解できるように授業内容を大幅に拡大させたが、2020年度は新型コロナウイルス感染症拡大の影響を考慮して、「日本文化研修Ⅰ」だけを後期に開講することとなった<sup>6</sup>。

3 小学校および中学校学習指導要領(平成29年告示)には特別活動の目標として、「様々な集団活動に自主的、実践的に取り組み、互いのよさや可能性を発揮しながら集団や自己の生活上の課題を解決すること」が挙げられている。

4 村越純子(2017)「我が国の義務教育課程における道德教育のあり方の説明モデル」『城西大学教職課程センター紀要』1, 5-21、および、村越純子(2019)「『道德教育指導論』の授業のねらいと特徴」『城西大学教職課程センター紀要』3, 23-24、を参照。なお、筆者は城西大学の教職課程設置科目「道德教育指導論」、「特別活動論」、「生徒指導」、「教育課程論」を担当している。

5 城西短期大学のカリキュラム改訂の一環として教授会で承認された。

6 2019年度前期の「日本文化研修Ⅰ」の学外授業は、高麗神社(4月27日実施)、小川町(6月1日実施)、越生町(6月29日実施)の3か所においておこなった。高麗神社では高麗神社宮司による高麗神社の紹介や本殿における学業成就祈願儀式の体験、小川町では埼玉伝統工芸会館および史跡巡り、そして越生町では名所・黒山三滝を散策後、地場産業が理解できる「うめその梅の駅」の見学、越生町立図書館で開架書籍閲覧、さらに「うちわ工房しまの」で代表者島野博行氏から名産品の一つである伝統的十文字団扇づくりの説明をうけるなどをおこなった。そして2019年度後期「日本文化研修Ⅱ」の学外授業は、小川町和紙体験学習センターにおける紙漉き体験(10月5日実施)と、上野の国立博物館訪問(11月16日実施、主に平成館特別展「正倉院の世界」見学)をおこなった。

## 2.2 小川町にぎわい創出課との地域連携までの経緯

2017年度の「日本文化研修」で学外授業の対象地域として、越生町と小川町を選択した。両町を選択した理由は、筆者が1994年4月から2000年3月まで越生町史編纂執筆委員として<sup>7</sup>、また2001年6月から2003年3月まで小川町史編纂執筆委員として<sup>8</sup>、自治体史を執筆し、また当該地域を対象とした研究に携わったことにある。当時、職員として自治体史編纂担当の中心的役割を担った新田文子氏と石川久明氏（その後それぞれの町の町立図書館長となられた）から小川町にぎわい創出課、越生町教育委員会を紹介いただき、地域連携が可能となった。

小川町にぎわい創出課には企業支援グループ、地域振興グループ、和紙普及宣伝グループ3つの部門がある。留学生対象の地域教育としてお世話になった和紙普及宣伝グループは主に小川町の産業振興を担う部門である。

## 3. 小川町での学外授業の実施内容

### 3.1 実施計画

2020年度後期実施の「日本文化研修Ⅰ」実施に際し、2017年度から毎年の学外授業でご支援をいただいている小川町にぎわい創出課和紙普及宣伝グループ主幹の保田義治氏に相談した。昨年度までは前期と後期の2回に分けて行ってきた小川町での学外授業を、1日間（午前から午後までの工程）で行うことが可能かどうかである。

「和紙のふるさと」として有名な小川町には和紙体験学習センターがある<sup>9</sup>。同センターは本格的な手漉き和紙製作技術を学ぶことができる施設で、楮だけを使用した「細川紙」の製造技術を学ぶために全国から技術者が集まる研修施設でもある。和紙体験学習センターで留学生が紙漉き体験をするためには、新型コロナウイルス感染症対策として、約20人の受講生を2つのグループに分けて活動すること、そのために本学からの引率教員を2人にすることで実施可能であるとの連絡をいただいた。例年、学外授業は土曜日をお願いしてきたが、今年度は日程調整の結果、学外授業実施日を12月11日（金）とした。

提案された具体的な内容が表3.1に示されている。和紙体験学習センターでの「紙漉き体験」だけでなく、冬のこの時期にしか体験できない「楮の皮むき作業」、さらに「(和紙の)折り染め体験」が提案されている。表3.1にある「観光案内員」とは、小川町観光協会が実施している「おがわまちなか散歩ツアー」におけるボランティア観光案内の方のことである。この学外授業では受講生19人

7 村越純子（2000）「特徴ある越生高等小学校」, 越生町教育委員会編『越生の歴史Ⅲ〈近代〉』越生町, pp.454-495。このほかに筆者が携わった越生町の地域研究に関わる成果は以下のとおりである。村越純子（2001）「近代日本の農村における三年制高等小学校の性格－埼玉県越生尋常高等小学校高等科在学者の分析を中心に－」『中等教育史研究』9, 39-56。村越純子（2002）「国民学校特修科の性格に関する一考察－在学者の進路志望分析を通して－」『日本の教育史学』45, 142-161。

8 村越純子（2003）「大河公民学校第二部」「大河青年学校第二部」「大河国民学校特修科」, 小川町編『小川町の歴史 通史編（下巻）』小川町, pp.442-445, pp.448-449, pp.520-524。

9 埼玉県小川町公式サイト「和紙のふるさと 小川町」(<https://www.town.ogawa.saitama.jp/>)（最終閲覧日2021年1月31日）。

を2つのグループに分け、それぞれの活動を円滑におこなうために、「おがわまちなか散歩ツアー」の1時間コースをグループごとをお願いした。また、表3.1にある「かどや」とは、昼食場所とした小川町中心街にある割烹料理店「割烹角屋」のことである。今年度の学外授業は午前から午後にわたる活動のため、昼食先をみつけることが課題であったが、城西大学経済学部経営学科卒業生である関口久喜氏が経営する「割烹角屋」に受け入れてもらうことができた。

表3.1 小川町にぎわい創出課による提案内容

<p><b>城西短期大学の受入体制について</b></p> <p>期日 12月11日（金）                  時間 11：00～16：00                  人数 留学生19人 教員2人</p> <p><b>内容素案</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●19人を2チームに分割する。（9人+1人教授、10人+1人教授）</li> <li>●紙漉き体験を1枚行う。当日持ち帰り。</li> <li>●人気の折り染め体験を行う。当日持ち帰り。</li> <li>●初めての取り組みだが、楮の皮むき作業を体験してもらう。</li> </ul> <p><b>具体的な動き</b></p> <table border="0"> <thead> <tr> <th></th> <th>Aチーム</th> <th>Bチーム</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>11：00</td> <td>町歩き</td> <td>紙漉き体験</td> </tr> <tr> <td>12：00</td> <td colspan="2">一緒に昼食（かどや 1000円（税込み）の幕の内） かどやについては、11日の昼に対応可能とのこと。予約関係は保田が行いますが、支払いは当日お店でお願いします。</td> </tr> <tr> <td>13：00</td> <td>紙漉き体験</td> <td>町歩き</td> </tr> <tr> <td>14：00</td> <td colspan="2">一緒に楮の皮むき作業（11：30分小釜に火入れ）</td> </tr> <tr> <td>15：00</td> <td colspan="2">折り染め体験を行う</td> </tr> <tr> <td>16：00</td> <td colspan="2">終了</td> </tr> </tbody> </table> <p>町歩きについては、両チームとも、次のコースを想定しています。                  これでよければ、観光案内員の予約を行います。                  和紙体験学習センターもしくはかどや→青面金剛像（昔の風習）→馬橋（槻川と養蚕）→玉成舎（絹）→長屋（南裏通りと賑やかだった頃のこと）→メイン通り（江戸時代の市）→ヤオコー発祥の地→聖徳太子碑（神様崇拜）→和紙体験学習センターもしくはかどや</p> <p><b>費用</b></p> <p>体験 1500円（5枚）×4セット=6000円（当日持ち帰り 郵送料なし）                  諸経費 折り染め用の和紙処理について                  体験和紙を半切するので、19人分で体験和紙サイズで10枚が必要になります。この部分について、2セット分（3000円）の追加が可能かどうか、ご審議ください。</p> <p style="text-align: right;">担当：にぎわい創出課 和紙普及宣伝グループ主幹 保田義治</p>			Aチーム	Bチーム	11：00	町歩き	紙漉き体験	12：00	一緒に昼食（かどや 1000円（税込み）の幕の内） かどやについては、11日の昼に対応可能とのこと。予約関係は保田が行いますが、支払いは当日お店でお願いします。		13：00	紙漉き体験	町歩き	14：00	一緒に楮の皮むき作業（11：30分小釜に火入れ）		15：00	折り染め体験を行う		16：00	終了	
	Aチーム	Bチーム																				
11：00	町歩き	紙漉き体験																				
12：00	一緒に昼食（かどや 1000円（税込み）の幕の内） かどやについては、11日の昼に対応可能とのこと。予約関係は保田が行いますが、支払いは当日お店でお願いします。																					
13：00	紙漉き体験	町歩き																				
14：00	一緒に楮の皮むき作業（11：30分小釜に火入れ）																					
15：00	折り染め体験を行う																					
16：00	終了																					



この提案（表3.1）をもとに、本学定例教授会（11月20日実施）で学外授業の実施計画を説明し、12月11日（金）の午前10時から午後5時までの学外授業を実施することが了承された。表3.1にある開始時間の午前11時とは和紙体験学習センターでの活動開始時刻である。小川町駅から小川町役場を經由して和紙体験学習センターまで徒歩で引率することを考慮して、小川町駅に集合する時間を午前10時20分とした。表3.1に示された教材などの必要経費および昼食代は授業の運営経費に含まれている。

小川町にぎわい創出課の保田義治氏との事前打ち合わせは11月30日（月）の午後1時から小川町和紙体験活動センター内でおこなわれた。午後2時から保田氏とともに、実際に小川町駅からの行程を歩くなど、確認作業を徹底した。とくに昼食場所となる「割烹角屋」ではご店主とともに入口から着席までの動線、全席前向きで間隔を開けた着席方法や配膳手順などを確認した。

### 3.2 学外授業のための事前学習

「日本文化研修Ⅰ」は集中講義科目であるため、通常授業15回分（今年度のみ1回80分）の授業総時間数を、「事前学習授業」6回分、「学外授業」5回分（12月11日実施）、そして「事後学習授業」4回分の合計15回に振り分けた。

第1回授業（11月18日4限実施）では、まず授業目的とともに、昨年度実施した学外授業を、写真などをみせながら説明した。つぎに受講生の主体的参加を促すことを目的として、受講生全員に留学生としてとくに疑問に思っている日本での生活習慣について発表してもらった。この発表をとおして、留学生が1列に並んで移動することや、一斉に食事を開始することなどに慣れていないことがわかった。

第2回授業（11月25日4限実施）では、小川町の伝統産業のひとつである和紙に関心をもってもらうために、「国際交流としての折り鶴－日本における平和教育－」と題して、視聴覚教材を用いた講義をした。その後、和紙でできた千代紙を配布して、受講生に実際に和紙を用いて折り鶴を作成する時間をもうけた。

第3・4回授業（12月2日4・5限実施）では、表3.1に示した内容を、留学生が理解しやすいように視覚教材にまとめ直した資料に基づいて、小川町へ学外授業にでかける目的や行動計画の詳細を説明した。現地では2つのグループ（班）それぞれが集団活動を円滑に行えるようにするため、グループ（班）ごとにメンバーを確認し、班長の役割などを説明したうえで班長を決定した。また定刻に遅刻することがないように集合することや、安全重視の観点から一列歩行で移動することの意味について説明し、また地図をみせて移動経路の確認をおこなった。留学生にとっては、集団活動は馴染みがなく実感がもてないとのことだったので、グループ（班）ごとにソーシャルディスタンスをとったうえで、まとまって座ること、一列に並ぶこと、そして班長の点呼、なども実際に練習した。

第5・6回授業（12月9日4・5限実施）では、第3・4回授業で視聴覚教材として提示したシートの一部を学外授業当日に学生が携帯できるように配布し、行動計画の再確認を行った。このときに留学生に配布した資料は付録1に示されている。付録1の最後の2つのシートには各グループの班長および班員の学籍番号と名前が掲載されている（個人情報であるため、付録1には書き込んでいない）。

教室内で班長を先頭に1列に並ぶ練習をした後に、そのまま屋外に移動して点呼の練習をした。具体的には、城西大学キャンパス内の7か所を点呼予定の7か所（小川駅前→小川町役場→和紙体験学習センター→「割烹角屋」→和紙体験学習センター→小川町役場→小川町駅）に見立て、一列に並んだ状態で班長が点呼をとり記録するなどの訓練である。また、新型コロナウイルス感染症対策として、和紙体験学習センターの「手すき学習室」への入室を学生5人に制限して紙漉き体験をおこなうため、室内の5人の立ち位置や退出方法の確認などもおこなった。

## 4. 学外授業における体験型学習の成果

### 4.1 学外授業当日を振り返って

12月11日に行った学外授業（第7回から第11回）当日は、留学生のゼミナールを担当する杵渕友子教授が同行した。筆者がAチーム（第1班）を、杵渕教授がBチーム（第2班）を引率した。履修登録した19人のうち長期欠席者1人を除く18人全員が予定どおり10時20分までに小川町駅に集合した。その後は表3.1のタイムテーブルに従って留学生を誘導した。

小川町にぎわい創出課のご配慮により、和紙の指導技術者が計画時の3人から4人に増員され、また観光案内員もAチーム（第1班）には1人から2人に、Bチーム（第2班）には1人から3人に増員された。とくにAチームを担当した観光案内員の方は、史跡や名所の写真とそれについての簡潔な説明が付された手作りカードに基づいて、拡声器マイク付きスピーカを使用して説明された。

昼食をとった割烹料理店「割烹角屋」では、幕の内弁当にお味噌汁やお茶なども配膳された。新型コロナウイルス感染症対策として留学生は全席前向きで着席して食事をとった。

小川町和紙体験学習センターでは参加者全員が紙漉きと折り染めを体験し、つくった作品を持ち帰った。



和紙体験学習センターでの紙漉き体験の様子



和紙の折り染め体験の様子

### 4.2 学外授業後のレポート作成と発表会

「日本文化研修Ⅰ」では、学外授業後に体験学習によって得たことや考えたことをレポートにまとめ、受講生全員が発表することを課題とした。留学生にとっては日本語によるレポート作成そのものが日本語学習の機会であるため、学内のパソコン設置教室において各自がレポートを作成する時間を

設けた。

学外授業後の第12・13回授業（12月16日4～5限実施）では、できるだけ多くの留学生が日本語・日本文化について質問できるよう、その結果をレポートに反映させられるように、城西大学・現代政策学部にも所属する教職志望の学生に学習支援を依頼した。当該学生には今年度だけでなく昨年度にも留学生の語学支援を依頼しており、留学生に評判がよかった。

第14・15回授業（12月23日4～5限実施）では、受講者に作成したレポートを発表させた。

### 4.3 学習成果

第12回授業のはじめに、小川町にぎわい創出課から依頼されたアンケートを実施した（「おがわまちなか散歩ツアー アンケート用紙」配付）。このアンケートは観光案内の資質向上を目指すことを目的としたものである。その内容は観光案内員の態度について、①説明の内容、②声の大きさ、③説明の速さ、④案内員の誘導（交通誘導を含む）、⑤案内員の印象についてそれぞれ5段階（「良い」「やや良い」「普通」「やや悪い」「悪い」）の評価を問うものと自由記述で構成されている。集計結果の概要は表4.1に示すとおりである<sup>10</sup>。留学生18人全員が「案内員の印象」について「良い」を選択している。自由記述部分には「全部いいと思う、ありがとうございます。説明は外国人もよくわかる、とても親切な案内員さんです。小川町の歴史は始めて知りました。見聞を広めたと思う。」や「案内員が説明してくれた内容が分かりやすく、内容が面白くて素晴らしい観光でした。お疲れ様でした。ありがとうございます。」など、多くの学生が観光案内員に対して感謝の言葉を述べている。

表4.1 「おがわまちなか散歩ツアー アンケート」の集計

質問項目	良い	やや良い	普通	やや悪い	悪い
①説明の内容	17	1	0	0	0
②声の大きさ	16	2	0	0	0
③説明の速さ	15	2	1	0	0
④案内員の誘導	17	1	0	0	0
⑤案内員の印象	18	0	0	0	0

\* 数値は回答人数を示す。

付録2として、学生が作成したレポート2つを挙げた。レポート①の学生はAチーム（第1班）のメンバーである。レポート①を読むと、和紙体験学習センターでの紙漉き体験をきっかけにして、現代における和紙という伝統文化の意味に思いをめぐらせていることが分かる。ほかにも、和紙体験学習センターにおける「紙漉き体験」、「楮の皮むき作業」や「折り染め体験」で感動したことを詳しく述べるレポートがみられた。レポート②の学生はBチーム（第2班）のメンバーである。レポート②

10 小川町観光協会事務局によるアンケートの集計結果である。

のように、昼食をとった割烹料理店で配膳された和食や、「おがわまちなか散歩ツアー」体験をとおして小川町に残る文化財の保存状態に感動し、そのことを友達に伝えたい、または友達に紹介するためにいっしょに小川町に行きたいと書いている学生も多かった。小川町職員、和紙体験学習センターの技術指導者、そして観光案内員という小川町からの10人の支援者との交流があったからこそ、留学生たちは充実した体験活動ができたのだと思う。

## 5. おわりに

本稿は、地域連携のための留学生「教育プログラム」の実践例として城西短期大学開講科目「日本文化研修Ⅰ」を取り上げ、2020年度における授業内容を紹介した。授業を実施するにあたり、新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から様々な制約が課せられた。「日本文化研修Ⅰ」の学外授業も危ぶまれたが、実施できたのは、小川町にぎわい創出課の支援を得て、十分な感染症対策をとることができたからである<sup>11</sup>。また学外授業の教育成果として、留学生は訪問した地域の地場産業や文化財に強い関心をいだいただけでなく、日本の自治体がかつ地域の組織力なども理解していたように思う。訪れた留学生の多くが、また小川町を訪問したいと思えたことが、この地域の観光産業への貢献につながると考える。大学と地域の双方が好循環を促す関係を形作る継続的な信頼関係やその結果としての教育成果を確認することができた。このことがさらなる好循環を生み出してくれると確信している。



和紙体験学習センターでの集合写真  
(各自が漉いた和紙をもって)

11 この背景には2017年度からお世話になっている、小川町にぎわい創出課和紙普及宣伝グループとの信頼関係があったと考えている。同グループによる感染症対策に配慮した行動計画の提案に基づき、「和紙体験学習センター」と「小川町観光協会」のご協力のもと、この学外授業が成立したのだと思う。自治体による安全対策があったことで、留学生は安心して紙漉き体験や町歩き体験などの体験型学習をすることができた。

## 6. 付録

### 付録1 第5回授業で配布した資料

「日本文化研修Ⅰ」  
学内授業

**12月11日実施**  
**小川町での学外授業にむけて**

2020年12月9日（水）

村越 純子

1

**小川町の特産品「細川紙（ほそかわし）」**

- 楮（こうぞ）のみで作るとても丈夫な和紙
- 2014年にユネスコの無形文化遺産保護条約「人類の無形文化遺産の代表的な一覧表」に「和紙：日本の手漉和紙技術」として登録
- 「小川町和紙体験学習センター」で紙漉き体験

2

**小川町にぎわい創出課との地域連携活動**

12月11日に支援して下さる方（6人）

- 小川町にぎわい創出課 保田（やすだ）さん
- 観光案内員 2人
- 小川町和紙体験学習センターの職員（技術者）3人

3

東武東上線 小川町駅 改札前での集合時間：**10時20分**

- ① 東武東上線 **池袋駅発 9時発 乗車**  
（坂戸駅発 9時44分発 乗車）

**小川町駅 10時10分着**

- ② 遅刻者を待たず**小川町役場へ移動**（トイレ可能）  
11時前に**小川町和紙体験学習センター**へ到着

4

**交通安全対策：点呼後、一列で移動**  
（マスク装着）

- ① 第1班と第2班で**毎回間隔をとり一列に並ぶ**  
【安全確保のために大事なこと】
- ② **第1班の班長**が点呼し、班長を先頭に一列で移動
- ③ **第2班の班長**が点呼し、班長を先頭に一列で移動

5

**新型コロナウイルス感染症対策**

第1班 と 第2班 は別行動

第1班：**町歩き**→食事→**紙漉き**→楮の皮むき→折り染め  
（角屋）（小川町和紙体験学習センター）

第2班：**紙漉き**→食事→**町歩き**→楮の皮むき→折り染め

6


付録1 (続き)

### 小川町和紙体験学習センターでの注意

- 職員の方の指示に従うこと
- 火気厳禁：禁煙！（敷地内すべてで禁煙）
- トイレが 和式  
(小川町役場でトイレ休憩あり)

7

### 紙漉き体験のときの立ち位置



8

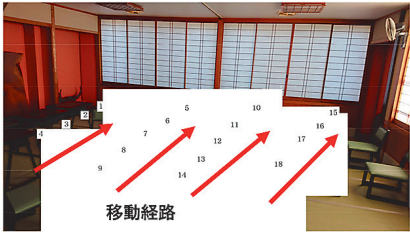
### 角屋(かどや)でのルール (感染症対策)

- 「割烹角屋」  
TEL:0493-72-0457
- クラスター発生防止対策  
食事中に互いに話さない！
- 店主は 城西大学 卒業生



9

### 角屋 2階 和室 (全席 前向き)



移動経路

10

### 第1班のメンバー (村越先生と移動)

1 村越	1班長		
	2		
	3		
	4		
	5		
	6		
	7		
	8		
	9		

11

### 第2班のメンバー (杵渕先生と移動)

2 杵渕	1班長		
	2		
	3		
	4		
	5		
	6		
	7		
	8		
	9		
	10		

12

## 付録2 学生によるレポート

## レポート①

埼玉県小川町といえば和紙で有名な町だ。なかでも、丈夫で厚みがあるのが特徴の特産品“細川紙”は国の重要無形文化財の指定を受けているほどだ。その歴史は正確には定かではないが、一説によれば1300年ほど前にまでさかのぼれるのではないかとされている。数ある伝統産業のなかでも、和紙や絹、建具などが特に知られている。和紙の歴史は古く、1300年も前から和紙づくりが行われていたとのことである。和紙は、厳しい寒さと水が冷たいほど、いいものができるというたいへんな作業である。

センターではまずは、紙を漉くための道具の一つ、竹の説明を受けた。この竹製の簀を挟んで道具は完成した。続いて原料となる“ねり”の説明を受けた。和紙の原料は、楮とねっとりとしたトロロアオイという植物からとった液体である“ねり”と水のみだ。このトロロアオイの粘着力がポイントなんだそう。最初は簀をセットした竹を“ねり”の中に入れて、チャブチャブと上下、左右にふりながら簀の上に薄い膜をつくっていくイメージである。3～4回ほどゆすっていく工程を繰り返すと、簀の上にしっかりとした膜ができた。一人で紙漉きにチャレンジすると、原料をくみ込んだり、ふるい落としたりするタイミングが難しかった。原料をくみ込むタイミングを間違えると、和紙に波型ができてしまう。初心者の方はみんなできてしまうので心配しないで、と励まされたが、ダイナミックな波形が完成してしまった。均一にゆすることが、いかに難しいのかを肌で実感した。これも和紙の貴重なところであり、一枚一枚が手作りで作られている。新しいメディアが普及した今でも、紙の需要が増えている。しかし、人類はグリーン資源の減少やゴミの増加など地球環境の問題に直面している。和紙は経済的な面で洋紙とは比べ物にならないほど高い。多くの生活用品がプラスチック製品に譲られている時代に、和紙は伝統的な活動と趣味の世界に限って、その特殊な存在価値で人々に精神的な楽しさを与えている。

今回の体験はとても良くて、新しい知識をたくさん学びました。楽しかった。

## レポート②

先週の金曜日の朝、私達のクラス全員は小川町駅に集合して、天気はとても良くて、太陽が暖かいと感じました。留学生たちはA、Bの二つの隊列に分かれていて、みんなが駅から小川町役場まで歩いていたときに、通りにはほとんど人がいませんし、店もほとんど営業していませんでした。ここには人が住んでいないのではないかと思います。とても静かな町でした。高齢者が住むにはとてもいいと思います。若者はにぎやかなところに住むのが好きでしょう。

センターに来て中に入ると、ほのかな香りがしました。案内員が説明してくれました。コウゾの原木を蒸かした匂いでした。みんなが挨拶した後、Aグループはまず周辺を参観しました。Bグループはセンターで製紙を体験しました。次は私の一番楽しみな部分です。自分で和紙を作ります。製紙の水は米を入れたかのように濃く、とても冷たい感じがしました。案内員がやってみせてくれるのを見ているときには簡単だと思っていましたが、自分でやるには力があるし、腰にも力が入ります。百年以上前の和紙で作った手帳に触れました。これは本物でした。

昼は城西大学を卒業した先輩が経営するお店で昼食をしました。フライドチキン以外の料理は初めてでしたが、本格的な和風弁当がおいしく、店内の窓も和紙でできていて、とてもきれいでした。

それから私たちは小川町駅の近くの歴史的な建物を参観しました。その中で180年前に営業していたホテルにとっても興味を持ってました。外観から見ると、もう長い時間が経っていますが、このお店は当時のある程度の賑わいを見せています。これらの古い建物と寺を見て、まるで何百年も前に戻っているようで、建物を保存することができるこんな完璧さにとても感心しました。多くの屋根のデザインと中国古代の屋根は非常に似ています。中国の道教から日本に伝わった仏像があります。青面金剛qi men kon goと言います。

家に帰る途中、今日の見聞を思い出しました。また機会があれば、学校の同級生や先生と一緒に校外を見学したいです。これはとても有意義な体験と思いました。

## 【地域連携報告】

# 図書館から広がる地域連携

——知の拠点、地域の拠点を目指して——

小川佳菜子\*・宮内博子\*\*・甲田さと美\*\*\*

## 1. はじめに

城西大学水田記念図書館<sup>(1)</sup>は、図書室というかたちからスタートし、1978年に現在の図書館棟が竣工された。閲覧席856席、積層書庫5層を有する地上9階建ての図書館は、大学のシンボルとして学生に親しまれている。2018年、7・8階に新しくオープンしたラーニングcommonsは、新しい学びの場として教員や学生に多く利用され、図書館の活用の幅はますます広がっている。当館の蔵書およそ47万冊は学部に沿って構成され、電子ブックや電子ジャーナルなど多くの電子資料も提供している。また、2010年より立ち上げた城西大学機関リポジトリ「JURA」では、本学の紀要類、教育・研究成果、および学内広報資料などを公開している。

当館は、大学の理念に基づき、地域と共にある図書館を目指しており、近隣公共図書館との連携や一般の方への利用開放などの地域貢献活動にも力を入れている。今回は、これらの地域貢献活動について、事例を交えて紹介する。

## 2. 地域相互協力図書館連携事業

### 2.1 地域連携のはじまり

今から14年前の2007年1月19日、埼玉県図書館協会平成18年度図書館ネットワーク研修会において、埼玉県内公共図書館と埼玉県内大学図書館間の相互協力要領について図書館ネットワーク専門委員会の試案が示された。これを受け、地域の公共図書館とネットワークを構築し、図書館活動を拡張していきたいと考えていた本学に、その年の5月24日、鶴ヶ島市および鶴ヶ島市立図書館から大学と市の協定締結の打診があった。これに伴い、当館も図書館同士の協定について積極的に対応し、2ヵ月後の7月20日に相互協力協定を締結することとなった。その後、隣接する毛呂山町、坂戸市、日高市、越生町、飯能市とも協議を重ね、現在ではこれら6市町との提携が成立している。

さらに2013年6月4日、本学は、～地(知)の拠点としての大学と地域との連携共同宣言～を掲げ、キャンパスに沿って流れている高麗川流域を取り巻く鶴ヶ島市、毛呂山町、坂戸市、日高市、越生町の地域行政と、問題解決のための連携協力を開始した。地域教育力の向上や健康長寿の推進などを中心とした取り組みテーマを設定し、活力ある安心・安全な地域コミュニティ実現に向けた貢献を宣言している。

本学における地域連携の歴史に図書館が大きく関わっていることは実に誇るべきことである。

---

\* 城西大学水田記念図書館

\*\* 城西大学水田記念図書館・株式会社紀伊國屋書店

\*\*\* 城西大学水田記念図書館・日本アスペクトコア株式会社



## 2.2 館長及び主務者の集い

この集いでは前年度の連携事業報告と当該年度の合同主催公開講座、合同研修会のテーマを検討する。それらの会場や講師はテーマによって担当を分担しているが、2019年度の合同研修会と2020年度の事業は新型コロナウイルス感染症対策のため、苦渋の決断で実施を見送った。

館長及び主務者の集いは、公共図書館同士が現場の問題をタイムリーに共有できる貴重な場となっている。当館からは大学生の図書館利用の傾向や、連携地域住民の来館者数など当館の利用状況を報告する。事前に公開講座と研修会のテーマについてアンケートをとり、欠席館の意見も反映できるように配慮している。2018年度は7月3日に開催され、公共図書館から「利用者の多くは、食や健康・郷土史に興味を持っている」「利用者同士のトラブルについて対策していることがあれば伺いたい」という意見が挙がった。これを受けて公開講座は「特定保健用食品・栄養機能食品・機能性食品の違いや特徴（効能）」を中心テーマとし「健康食品との正しいつきあいかた」というタイトルに決定した。10月27日に坂戸市立中央図書館を会場として本学薬学部医療栄養学科の教員が講師となって開催した。研修会は「危機管理とクレーム対策」を中心テーマとし、「クレーム対応などに関するさまざまな事例」というタイトルで各館における事例紹介とそれに基づく意見交換を実施した。



図2.1 2016年度 館長及び主務者の集い

## 2.3 合同主催公開講座

公開講座<sup>(2)</sup>は大学が地域の生涯教育に貢献する上で重要なイベントとなっている。大学が主催する公開講座以外に、当館では地域の公共図書館と合同主催という形をとり、2009年11月に開催した「中島歌子の生涯 / 『おくのほそ道』の旅の成就」を第一回とし、以降毎年開催を続けてきた。

小規模な自治体では、財源が限られていることも多い。そのため、専門家の講師を招くことは容易ではなく、会場の確保も難しいといった事情がある。そのような自治体が抱える課題に対し、大学の資源である専門知識を持った教員に協力していただくことで、質の高い専門的な話題を無償で地域に提供できる。



図2.2 第4回「くすりにやさしく：知っておきたいくすりのかたちと正しい使い方」(2012年度)

公開講座の参加者は中高年の割合が多く、食や健康、薬に関する情報への興味関心の度合いが高い。テーマの検討に際し、当館長（薬学部教員）より、昨今の医療制度改革に関する話題が提供された。「公共図書館の健康に関する資料の選書を薬剤師会がサポートし、利用者がより正しい情報に触れられるようにすること」、また「薬学系図書館は公共図書館に専門性のある情報を提供し、公共図書館は啓発活動の前線として地域住民に情報を還元すること」といった各種の役割が期待されていることが話された。

過去には、第4回「くすりにやさしく：知っておきたいくす

りのかたちと正しい使い方」や第9回「地域包括ケアシステムにおける薬剤師の役割」を開催した。どちらの回も本学薬学部の教員が講師を務め、各回約50名の参加者が来場して大変好評だった。

また、時事問題や社会問題への高い関心に応えるため、第7回「TPPとアメリカの世界戦略：オバマ政権の推進するTPPの真の狙いは何か」、第8回「世界の中の日本、日本の中の世界－身近なグローカリズムを考える－」などでは、経済学部教員が講師として登壇した。TPPは当時高い関心が寄せられていたテーマだったこともあり、91名が参加するなど、多くの方が参加された。

公開講座は、地域イベントとして、参加者の知的好奇心を満たすことができ、同時に大学を身近に感じてもらえる絶好の機会でもある。2020年度はコロナ禍の影響があり、開催が難しい状況となっているが、今後も重要な地域貢献の場として継続していきたい。

## 2.4 合同研修会

研修会<sup>(3)</sup>は、館種を超えて図書館員間で日々の業務に関する悩みを解消することを目的に催されている。開催テーマについては毎回アンケートをとり、時節にあったものを取り上げている。初回はレファレンス事例を持ち寄って意見交換を行う場として実施し、第2回は「破損本の修理・補修」(2012年2月28日)と題して当館スタッフが講師となって実施した。好評であったため、翌年3月1日には実践編を開催した。公共図書館でボランティア活動をしている方など参加者19名が破損本を持ち寄り、実習しながら修理方法を学んだ。第9回には、「館内展示のアイデア・ポップ作成のノウハウ」(2018年3月22日)をテーマとし、各館で実際に作成・活用されているPOPを紹介し、グループディスカッションを行った。当館からも事例発表を行い、活発な意見交換の場となった。

## 2.5 今後の課題

図書館が館種を超えて連携することで、自館だけではできなかった活動が実現可能になったが、いくつか課題もある。指定管理者制度による担当者交替のため継続的にこれらの活動に関わることでできない館や行事日程の調整が難しくなかなか参加できない館があり、その影響で運營業務に偏りが出

	演 題	会 場
第1回	中島歌子の生涯 『おくのほそ道』 の旅の成就	城西大学 水田記念 図書館
第2回	室生犀星－切なき 思ひぞ知る－ 小林一茶－ 『寛政三年紀行』 わらびの駅	城西大学 水田記念 図書館
第3回	原発と人間	鶴ヶ島市 立中央図 書館
第4回	くすりにやさしく －知っておきたい くすりのかたちと 正しい使い方	坂戸市立 中央図 書館
第5回	暮らしに役立つ身 近な経済・経営－ 高度成長を続ける 中国とどう付き合 うのか	城西大学 水田記念 図書館
第6回	地域産業の現在： JAPANブランド による今治タオル の復活	城西大学 水田記念 図書館
第7回	TPPとアメリカ の世界戦略： オバマ政権の推 進するTPPの真 の狙いは何か	城西大学 水田記念 図書館
第8回	世界の中の日本、 日本の中の世界 －身近なグロー カリズムを考える－	城西大学 水田記念 図書館
第9回	地域包括ケアシ ステムにおける薬 剤師の役割	鶴ヶ島市 立中央図 書館
第10回	健康食品との正し いつきあいかた	坂戸市立 中央図 書館
第11回	生活習慣病と地域 の特性見聞録： 埼玉県民は大丈夫 か？！	毛呂山町 立図書館

表2.1 「地域相互協力図書館合同主催  
公開講座」過去の演題(2009  
～2019)



図2.3 第9回「館内展示のアイデア・ポップ作成のノウハウ」(2017年度)

ているのが現状である。それでも互いの図書館利用者にとってより良いサービスを提供するためには、これらの活動は必須となっている。そのため「館長および主務者の集い」の欠席館には、事前アンケートを回答してもらう以外にも当日の配布資料や議事録を送付するなど、良好な関係を継続できるよう工夫している。

公共図書館と大学図書館という館種を超えた交流、それは自館を運営していく上で非常に心強い関係である。20年30年

先もこれまで築いてきた「顔の見える交流・声の聞こえる交流」が途切れぬよう、さらなる発展を目指していきたい。

### 3. 近隣公共図書館主催イベントへの参加

#### 3.1 鶴ヶ島図書館まつり

地域連携が図書館から始まったことについては先にも述べたが、近隣公共図書館との相互協力事業の代表的なイベントに「鶴ヶ島図書館まつり」<sup>(4)</sup>が挙げられる。鶴ヶ島市立図書館は、年に一度図書館まつりを開催しており、本学薬学部の学生が作成した「みんなで栄養かるた」や「みんなでお薬かるた」を使用したかるた大会も行われていた。当館が初めて参加したのは2010年「第23回図書館まつり」で、「平成22年度第1回 地域相互協力図書館 館長及び主務者の集い」において、当館が参加を示唆したことにより始まった。参加にあたっては、「漢方医学古書と道具」と題し、当館所蔵の漢方古書資料や薬匙・薬籠、駅伝部関係の写真やユニフォームの展示を行った。併せて大学のグッズ、薬学部の研究成果である化粧品や栄養かるたなども販売し、来場者との交流を深める場となった。

展示として出展している漢方古書資料は、現代の医療、薬学、栄養学を学習する上で先人の叡智を学ぶことを重要と捉え、歴史的考察の資料として蒐集・保存しているものである。新旧の情報提供として来場者へ展示ブースの解説を行うことにより、本学の活動をアピールすることができる。また、近年では、先生方のご協力のもと、「体験型展示」にも取り組むようになった。2018年には、理学部数学科の小木曾先生にご協力いただき、「江戸時代の娯楽としての数学」と題し、所蔵している『塵劫記』復刻版をもとに、和算を利用した

実施回	出 展
第23回	漢方医学古書と道具
第24回	漢方医学古書と道具 日本近代漫画の先駆者：北沢楽天
第25回	日本の伝統医学：暮らしに生かす漢方の知恵
第26回	Cool Japan浮世絵の魅力：外国人から見た日本の美
第27回	日本人の知恵、漢方
第28回	世界を魅了した日本の版画
第29回	明治時代のくすり広告・紙看板
第30回	芭蕉と江戸俳諧の世界
第31回	江戸時代の娯楽としての数学
第32回	ディスプレイの仕組みと光の不思議：液晶の液ってなに？

表3.1 「鶴ヶ島図書館まつり」過去の出展内容(2010~2019)



図3.1 第31回「江戸時代の娯楽としての数学」大学院生による展示解説(2018年度)

「誕生日当てクイズ」や「油分けゲーム」などを来場者に参加体験してもらった。数学専攻の大学院生2名がボランティアとして参加してくれたことにより、ゲームを通して展示図書の解説や数学についての理解をより一層深める展示となり、特に親子連れには好評であった。2019年には、理学部化学科の橋本先生からレクチャーいただき、光の原則や液晶を説明するため、実験を交えた体験型の展示を行った。「昨年の数学ゲームが楽しかったからまた来ました」という、親子からの嬉しい声がけもあった。普段図書館で学生アドバイザー<sup>(5)</sup>として活動している

理学研究科物質科学専攻の1年生は、化学実験や展示の説明を行うかたちで活動に参加してくれた。展示の終了後には、「幼児からお年寄りまでたくさんの方が見に来てくれ、教員志望の自分にとって、目をキラキラ輝かせながら実験に参加する子供たちとの時間は幸せそのものだった」と感想を語り、地域社会とのふれあいが、本学学生にとってもかけがえのない貴重な体験になっていることをあらためて感じた。先生方にご協力いただいたこれらの参加型展示は、本学が有する学部についても広くアピールすることができ、貴重書の展示とはまた別の効果もあると考える。



図3.2 第32回「ディスプレイの仕組みと光の不思議：液晶の液ってなに？」図書館学生アドバイザーによる展示解説（2019年度）

### 3.2 ビブリオバトルの広がり

ビブリオバトルとは、制限時間5分間でおすすめの本を紹介しあう書評ゲームである。観客が一番読みたくなった本に投票し、「チャンプ本」を決めることができる。当館では、2011年6月に行われた「ビブリオバトル in 紀伊國屋大学生大会」への出場を契機とし、毎年「全国大学ビブリオバトル」予選会を主催している。当初から、地域の方もジャッジに参加いただいております。また、坂戸市立図書館ボランティアの方が見学に来てくださるなど、学生と地域の方が交流する機会にもなっていた。

こうした当館での取り組みをきっかけに、近隣の相互協力図書館にてビブリオバトル<sup>(6)</sup>の開催が徐々に広がっていった。先に紹介した「合同研修会」にて、取り上げるテーマを相互協力図書館に募集した際、「ビブリオバトルを開催したいと考えている。大学ではどのように運営しているか参考にしたい」との要望が寄せられ、2014年9月7日に実施した第5回合同研修会にて当館のビブリオバトルの開催事例を紹介した。それを参考に、2015年8月、日高市立図書館主催「2015夏の陣 図書館ビブリオバトル」が開催された。バトラーが高校生だったことから、「ぜひ大学生にお手本となってほしい」との依頼があり、本学からは3名が出場、うち1名がチャンプ本を獲得した。以降、同年9月には鶴ヶ島市立図書館主催「第28回図書館まつ

開催年度	主催図書館	出場学生数
2015	坂戸市	2
	鶴ヶ島市	1
	日高市	3
2016	坂戸市	2
	鶴ヶ島市	1
	日高市	1
2017	日高市	1
	坂戸市	2
	鶴ヶ島市	2
	日高市	2
2018	日高市	1
	坂戸市	1
	鶴ヶ島市	1
2019	日高市	1
	坂戸市	2
	鶴ヶ島市	3
2020	日高市	1

表3.2 地域相互協力図書館ビブリオバトル本学学生参加一覧



図3.3 日高市立図書館主催「ビブリオバトル2018冬の陣」図書館学生アドバイザーによる発表



図3.4 坂戸市立図書館主催「第5回ビブリオバトル坂戸図書館」



図3.5 坂戸市立図書館主催「第5回ビブリオバトル坂戸図書館」本学学生がチャンプ本を獲得

り」にて「ビブリオバトル『わたしのイチオシ本』」が、同年11月には坂戸市立図書館主催「秋の図書館まつり」にて「第1回ビブリオバトル」が、次々に開催されることとなった。2020年度はコロナ禍の影響により、12月の日高市立図書館主催「ビブリオバトル2020冬の陣」のみの開催となったが、2019年度まで毎年学生への出場依頼が続いていた。日高市立図書館では、出場した高校生と交流の場を設けていただくなど、学生が直接地域の方と関わる貴重な機会となっている。

#### 4. 図書館と県民のつどい埼玉

埼玉県図書館協会、埼玉県教育委員会が主催する「図書館と県民のつどい埼玉」<sup>(7)</sup>は、「本に興味をもっていただきたい、図書館について知っていただきたい」という思いから始められた、埼玉県内の大学、高校、市町村等の図書館が集まり実施する、県内最大の図書館イベントである。作家による講演や、県内図書館による展示や体験コーナー、中学生によるビブリオバトルなども開催され、毎年多くの来場者で賑わっている。

当館は、埼玉県内の大学・短期大学の図書館を会員とする地域コンソーシアムである「埼玉県大学・短期大学図書館協議会（略称SALA）」として、2009年度に開催された第3回から参加しており、「大学図書館のお宝、お見せします」と銘打たれた加盟機関有志による所蔵資料の合同展示を行っている。毎年10館前後の図書館がそれぞれ所蔵資料の展示を行っており、当館もコロナ禍により不参加となった2020年度を除いて毎年参加している。

この「図書館と県民のつどい埼玉」では、先述の鶴ヶ島図書館まつりと同様、当館所蔵の貴重書やコレクションの展示を行い、来場者との交流を図りながら本学をアピールしている。また、県内の県立図書館、公共図書館、高校図書館など

実施回	出 展
第3回	国勢調査の歴史
第4回	漢方医学古書と道具
第5回	日本近代漫画の先駆者：北沢楽天
第6回	日本の伝統医学：暮らしに生かす漢方の知恵
第7回	Cool Japan浮世絵の魅力：外国人から見た日本の美
第8回	日本人の知恵、漢方
第9回	世界を魅了した日本の版画
第10回	明治時代のくすり広告・紙看板
第11回	芭蕉と江戸俳諧の世界
第12回	江戸時代の娯楽としての数学
第13回	ディスプレイの仕組みと光の不思議：液晶の液ってなに？

表4.1 「図書館と県民のつどい埼玉」過去の出展内容（2009～2019）



図4.1 第8回「日本人の知恵、漢方」展示（2014年度）

様々な館種の図書館が参加していることもあり、情報交換などの交流の場にもなっている。

## 5. 城山中学校職場体験

当館は、地域貢献活動の一つとして、2016年より中学生の職場体験学習の受け入れ協力を行っている。毎年、城山中学校の1年生数名が当館に業務体験に訪れ、図書の受入業務や装備、貸出や返却などのカウンター業務を2日間体験し、3日目の最終日には、おすすめ図書としてそれぞれ持参した好きな本のPOPを作成、展示している。

中学1年生が、踏み入れたことのない職場という社会の中で、大人に混じりながら仕事を体験するということには、多くの不安や心細さを感じるだろう。それにも関わらず、一生懸命取り組む姿勢には、我々図書館員も学ぶべきことは多い。中学生における職場体験学習については、職業観を身に付けたり社会的なルールやマナーを体得するなどの意義がある。それとともに、受け入れる側にとっても、地域への貢献や職場の活性化などの意義も大きいといえる。職場体験により、地域の仕事や身近で働く人々への関心が深まれば、自分たちの住む町への愛着も深まることとなる。

地域全体で生徒を育てていくことに、当館も携わることができるのは、大変有意義なことと考える。

職場体験学習後には、生徒よりお礼の手紙をもらい、図書館でも中学校の了承を得て、体験学習の様子を図書館報『BookMark』やHPに掲載して広く周知している。3日間の体験学習に留まることなく、中学生の未来に教育支援というかたちで関わることができたなら、本学の目指している“地域と共にある大学”に近づけるのではないかと考える。

## 6. 地域アドバイザー

2014年に地域の方に図書館活動を支援していただく地域アドバイザー制度を発足した。当館をよく利用される地域の方の中から図書館長が委嘱し、経験豊富な人生の先輩による、本の魅力、読書の大切さを学生に伝えるためにご尽力いただいている。

2018年からは学生に読んでもらいたい本を推薦していただき、1冊ずつの選書コメントとともに館内展示を始めた。毎回バラエティに富んだ本が並び、ほとんど全ての本が借りられることもあり人気の展示の一つである。

さらにそれぞれの経験や知識を生かしたミニ講演会（ライブラリーラウンジ）<sup>(8)</sup>も実施し、学生との交流が広がっている。2018年6月には、地域アドバイザーの方を講師に招き、学生アドバイザー主催第15回ライブラリーラウンジ「問題解決ストーリー」を開催した。企業の現場における品質管理



図5.1 2019年度図書の装備作業を体験



図5.2 2019年度生徒2名が制作したポップ

(QC) について、長年のご経験を基にお話していただき、参加した学生からは「課題を明確にすることが大事だと分かった」「体験談を交えながらのお話だったので、参考になった」などの感想が寄せられた。主催した学生アドバイザーは事前に講師と打ち合わせを重ねるなど密にコミュニケーションを図った。毎年2月に実施する学生アドバイザーの送別会には地域アドバイザーの方もお招きし、世代を越えた交流を楽しんでいる。

## 7. ライブラリーカード会員制度

当館では、一般の方に対し、広く学習・調査または研究を支援し、学術情報資源の効果的な活用を地域に拡大することを目的とし、広く門戸を開いている。15歳以上の方なら誰でも入館し、資料を閲覧することができる。資料の閲覧だけでなく、2008年4月以降、18歳以上の社会人の方を対象にした貸出サービス「ライブラリーカード会員制度」も継続しており、2020年4月時点で近隣の方など40名が会員となっている。この制度は、相互協力図書館からの「直接大学図書館の本を借りたいという地域住民の要望に応えることこそ相互協力ではないか」との声を受け、開始した制度である。1,000円の年会費を払って入会后、開架の図書5冊を2週間の期間で借りることができる。利用している方からは、「法学部出身で卒業後も勉強を続け、大学時代の教授が執筆した論文掲載の紀要をよく利用している」「色々な分野に興味がある。大学には公共図書館にはない分野の本があるので毎日でも来たい」といった感想をいただいております、好評を得ている。

2020年度はコロナ禍の影響を受け、一般の方の利用を休止しており、残念ながら年間を通じて利用いただけない状況となった。2021年度も感染拡大の度合いによっては、現在の対応を継続せざるを得ない。長期化するようであれば、地域の公共図書館と連携し、代替となる手段を模索していく必要がある。

## 8. まとめ

本学は、地域社会と共にある大学を目指し、授業や学生によるボランティア活動などを通し、地域の文化・教育・環境保護に貢献してきた。当館もこの大学の理念に基づき、数々の地域貢献活動につ



図6.1 2019年度ミニ展示「地域アドバイザーおすすめ本」



図6.2 第15回ライブラリーラウンジ「問題解決ストーリー」(2018年度)

年 度	申込数	更新数
2008	61	—
2009	20	21
2010	28	21
2011	25	28
2012	24	29
2013	15	35
2014	20	40
2015	34	54
2016	25	50
2017	17	45
2018	18	40
2019	16	16

表7.1 ライブラリー会員申込数／更新数

いて幅広く取り組んでいる。こうした、地域の公共図書館や大学図書館との相互協力を通し、地域のネットワークを構築していくことは、つまりは当館のサービスや活動をさらに拡充することにつながる。

今後、大学における地域への社会活動の支援や生涯学習の支援、地域住民への開放は、さらに大学や大学図書館に求められる機能となっていくだろう。地域や地域住民から評価される「地域に根差した大学」として、さらなる地域連携活動を進めていきたい。

## 参考文献

- (1) 城西大学水田記念図書館『城西大学水田記念図書館ウェブサイト』  
(<https://libopac.josai.ac.jp/>) (2021-1-27)
- (2) 城西大学水田記念図書館『城西大学水田記念図書館ウェブサイト地域相互協力図書館合同主催公開講座』  
(<https://libopac.josai.ac.jp/guide/statistics.htm#kokaikoza>) (2021-1-27)
- (3) 城西大学水田記念図書館『城西大学水田記念図書館ウェブサイト地域相互協力図書館合同研修会』  
(<https://libopac.josai.ac.jp/guide/statistics.htm#godokenshu>) (2021-1-27)
- (4) 城西大学水田記念図書館『城西大学水田記念図書館ウェブサイト鶴ヶ島市立図書館 図書館まつり』  
(<https://libopac.josai.ac.jp/guide/statistics.htm#tsurugashima>) (2021-1-27)
- (5) 城西大学水田記念図書館『城西大学水田記念図書館ウェブサイト学生アドバイザー』  
(<https://libopac.josai.ac.jp/apply/adviser.html>) (2021-1-27)
- (6) 城西大学水田記念図書館『城西大学水田記念図書館ウェブサイト地域相互協力図書館ビブリオバトル』  
(<https://libopac.josai.ac.jp/guide/statistics.htm#chiikibiblio>) (2021-1-27)
- (7) 城西大学水田記念図書館『城西大学水田記念図書館ウェブサイト図書館と県民のつどい埼玉』  
(<https://libopac.josai.ac.jp/guide/statistics.htm#tsudoi>) (2021-1-27)
- (8) 城西大学水田記念図書館『城西大学水田記念図書館ウェブサイトライブラリーラウンジ』  
(<https://libopac.josai.ac.jp/guide/statistics.htm#lounge>) (2021-1-27)



【地域情報】

## オオサキを見た！

——飯能・秩父地域に伝承される未知の生物目撃談

話	平井 大作
聞き取り	平井 亜未*
解説	加藤 寛之**

### 解説 「オオサキ」について

「オオサキ」は、飯能・秩父地域に伝わる伝説の生物とされる。「オオサキ」あるいは「オーサキ」「オサキ」という。近年は、その名を知る人は少ないだろう。

大石真人は、オオサキの調査をしたと著書『奥武蔵』に記してあり、詳細な記述を行っている。

大石氏によれば、「オオサキ」は飯能地域に広く伝承され、奥武蔵で「最大の勢力圏名栗では…」とある。見た人や捕らえたという人の話もある。同書には、今から20年程前（解説者注：昭和10年代？）、吾野村大字南642番地に居住する間野徳右衛門という人が3頭を切り殺して持ち帰り近所に披露したとあり、東吾野村白子にオーサキを埋めたという塚があると記述している。大石氏は、生物としては「秩父地方に多いエゾイタチかコエゾイタチをさしているのに違いない」としている。オオサキに関する記述は伝承やそれとされる生物の説明が多いが、大石氏は社会生活や西川材との係わり、語源にも言及している。

その姿は次のように書かれている。

「すなわち、その胴の長さは一尺三寸から五寸位、いたち位の大ききで足はみじかくもぐらのよう、指の間には水かきがあり、毛の色は黒、灰、茶、栗色等に白ぶちの奇々怪々な模様、顔はねこの様に丸くて黒いひげがあり、目は丸く小さく、耳は肉薄く丸みがあって後に寝て居り、尾は体の三分の一位で、飯盛り杓子に似て平たく、短い毛が一面に密生している。見るからに猪口才な風貌で、キチキチとかカツカツとか聞く人により違った変な声で鳴くという。」

関根邦之助「秩父の民俗オオサキについて」によると、オオサキとは秩父地方の独特の名称であり北関東ではオサキなる名称としたうえで、次のように書かれている。

「オサキ狐は民間伝承で云われる一種の怪獣であり、狐に似て色が白く、大ききはハツカネズミ位で尾が二つにさけ、その故オサキギツネといわれるとされ、…結局動物学上では想像動物としか考えられず、ネズミとイタチの雑種の如きもので、ハツカネズミより少し大きく、色は斑色、

---

\* 城西大学IR準備室

\*\* 城西大学広報課長

橙色、ネズミ色、茶色、灰色等の種々なる色調を示し、頭より尾まで黒い線があり、背中に白い条があるとも云われている。中部山岳地帯に伝説する怪獣、オコジョとも相通ずるものではなからうか。」

これらで語られたオオサキは、大きさも色も多様である。今回紹介する「オオサキ」は小型であり、新たな生態も証言されている。近年「オオサキ」が伝えられなくなったなかで、今回の目撃談は貴重である。

最後に参考資料の一部を掲載する。

### (参考資料)

- ・大石真人 (1954) 『奥武蔵』 朋文堂マウンテンガイドブックシリーズ
- ・神山弘・新井良輔 (1984) 『増補ものがたり奥武蔵 伝説探訪二人旅』 金曜堂出版部
- ・秩父民俗研究会 『秩父民俗』
  - 創刊号 (1968) 関根邦之助 「秩父地方の医療に関する迷信と風習」
  - 第2号 (1968) 関根邦之助 「秩父の民俗オオサキについて」
  - 第3号 (1969) 関根邦之助 「「おおさき狐」について図書館での文献調査」
  - 第4号 (1969) 野中義夫 「オオサキの語源に関する伝説其の他」
- ・埼玉県立久喜図書館が、レファレンスの記録をWeb上に公開しており、参照資料が記載してある。  
[https://crd.ndl.go.jp/reference/modules/d3ndlcrdentry/index.php?page=ref\\_view&id=1000103336](https://crd.ndl.go.jp/reference/modules/d3ndlcrdentry/index.php?page=ref_view&id=1000103336)  
提供館 埼玉県立久喜図書館 (2110009)  
管理番号 埼熊-2011-159  
事例作成日 2011年10月22日  
登録日時 2012年03月08日 13時39分  
更新日時 2012年06月03日 16時28分

## 証言記録

話	平井 大作
聞き取り	平井 亜未
聞き取り日	2020年10月27日
聞き取り場所	平井 大作 自宅

2021年に90歳を迎える祖父が以前にオオサキをみたという話をしていたので、詳しく聞き取りをした。平井大作 (89歳・聞き取り時点) は25歳から84歳まで猟をしていたベテランの猟師。2015年に引退した。

### ・オオサキを目撃した時期と場所は？

「日野管林と大滝だったいな。それと1匹で見たんは天目にのぼる登山道だいな」

どうやら、2度見たことがあるらしいので詳しく聞いてみた。

1度目は、仲間と猟に出かけたときで日野管林（荒川村・現秩父市）と大滝（村・現秩父市）の境いの頂上に上がりきる手前。仲間が鹿追して、そこはシカがよく通るところなのでタツバ（立つ場所のこと、待ち伏せ）していたときのこと、のこぎりで切った木がいくつか積み上げられているところにいた。その積み上げられている木の下を出たり入ったりしていたそうだ。

2度目は、大体同じくらいの時期に、ひとり猟に出かけたとき天目（天目山）に上る狭い登山道。シバ（落ち葉）がたまっているところの下にいた。そこには日が当たっていたので日向ぼっこして寝ていたのかなと言っていた。



地図を見ながら場所を指さす祖父大作

#### ・見た目の特徴は？

「白だの黒だの、茶色に白が混ざったような、まっさかきれいな動物だなんて見るのは見たったん。掌に乗るくれえの、ポケットに入れられる大きさだったいな。顔は可愛かった。」

※まっさか=とても・非常に

食卓にキウイがあったので、そのくらいか聞いてみたらもっと小さくてポケットにすっと入るくらいの大きさらしい。

#### ・なぜそれがオオサキとわかったのか

「だってそんな動物が普段いるわけねー。俺も初めて見た動物だもの。かわいいからってポケットに入れて持ってきたらいいこたあねえっつーわけだったいな。だけど人によっちゃあ欲しいものはオオサキが自分ち運ぶんだってわけよ。そんで大臣になったつうんだから。だからオオサキ持ちだって近所の人に憎まれたって話だったいな。まんざら嘘じゃねんだんべな。今そんな話する人いなくなっちゃったんな（笑）ふんとうにきれいな色だったんなあ・・・」

※大臣になった=お金持ちになった ※ふんとうに=本当に

この質問にどのように答えるのか一番興味があった。誰も見たこともないのになぜオオサキと分か

ったのが最大の謎だったが、山奥でいろんな動物を見てきた祖父が見たこともないとてもきれいでかわいい動物だったのでそう思ったと。当たり前のように話すので、すっと腑に落ちた。

・オオサキの話はどうして知っていたのか

「昔っからみんながよく話したったいな。かわいいからってポケットなんざいれて持って帰ると悪いことがあるとかゆう話は聞いたことがあるんよ。」

当たり前のように、昔はオオサキの話は出ていたらしい。かわいいからと持ち帰るとよくないことが起きるといパターンと、オオサキが欲しいものを持ってくるのでお金持ちになるというパターンの話。お金持ちになったら悔しいので、悪いことが起こるよ！と言っているんじゃないかと祖父は推測していた。だったら、持って帰ってきてほしかった。

・ほかに見た人がいるか

「見たこたなかんべ。俺も見たことねえかわいいきれいなもんがいるなあ。あ！これがオオサキってやつだって思ったんだから。俺あ2回見たけど、うんとおくりだよ。おくさん。」

※うんと=ずっと ※おくり=奥の方 ※おくさん=山奥

祖父の平井大作は秩父市の影森で生活してきたが、「今はそんな話をする人はいなくなっちゃった」時代に聞き取りをすることができた。飯能・秩父地域の民俗研究の貴重な記録の一つになることを願っている。

【地域活動ノート】

## 医療栄養学科におけるアクティブラーニングを介した 学生の自己効力感の向上に対する試み

～医療栄養学概論演習による高麗川プロジェクトの活動報告～

岩田直洋\*・古屋牧子\*・関口祐介\*・君羅好史\*・大澤吉弘\*・松本明世\*・真野 博\*

### 活動の概要

薬学部医療栄養学科（管理栄養士養成課程）では、1年次から4年次まで様々なアクティブラーニングなどの体験学習を継続的に実施することで、学生の自己成長に繋げる教育を実践している。その一環に高麗川プロジェクトへの参加があり、地域のシンボルとして馴染み深い高麗川をテーマに「環境」と「食」が密接に関係していることを体験する中で、地域活動に対して学生が自主的・主体的に取り組みながら管理栄養士として必要な知識や技能を養っていくことを目的としている。今回、地域活動が自己効力感などへ与える影響をアンケート形式で調査したので、その一部を報告する。

キーワード：管理栄養士養成課程、自己効力感、高麗川プロジェクト、高麗川かわガール、美化活動

自己効力は、課題達成に必要な行動を首尾よく行う能力の自己評価として定義されており、ある行動に対して自身がその行動をどの程度できるかという自信を指すものである。この自己効力感が高いほど物事に対して積極的に粘り強く取り組めるようになり、より良い結果を得られやすくなる。近年の大学教育において、学生の自己効力感の低下が問題となり、学習意欲や就職活動など様々なことに影響していると言われている。管理栄養士を養成する薬学部医療栄養学科では、この自己効力感の向上が大学生活あるいは社会人となつてからも重要と考え、それを向上させる方法として継続的なアクティブラーニングが有用であると捉えて実践している。

城西大学では、これまでに高麗川プロジェクトとして近隣地域との連携に基づく教育活動、地域活性化や共同体意識の啓発を支援・推進することを目的に様々な活動を実施してきた。その中でも本学科では、有志学生が任意団体である「高麗川かわガール」を立ち上げ、定期的に高麗川の美化活動や生態系調査を実施し、その情報を発信している。例年、この活動は1年生の前期に体験し、これから管理栄養士を目指していく学生が調理に伴う台所排水と水質環境の問題を身近に考えるとともに、高麗川の美化活動までを1つの体験学習とすることで「環境」と「食」が密接に関係していることを学ぶ機会としていた。しかし、今年度は新型コロナウイルスの影響で前期に実施できずにいたことから、後期科目である「医療栄養学概論演習」内で実施し、授業後には自己評価アンケートなどを行ったので、その一部を報告する。

医療栄養学科1年次生（20期生）93名を対象に学生が自主的・主体的に地域活動に取り組むことで、現状の自己効力感に対してどのように評価するかを21項目からなる自己評価アンケートの形式で調査した。その結果、図1（一部抜粋）に示すように「好奇心を持つ力」や「相手指向で考える力（ホスピタリティ）」について多くの学生が高い（優れているまたは、少し優れている）評価を示した。一方で、「伝える力」や

---

\* 城西大学薬学部医療栄養学科

「自己を肯定する力」が全項目のなかで比較的劣っていると捉えていることも明らかになった。達成感や成功体験は自己の自信へと繋がり、自己効力感が高まることで、様々な物事に対して積極的に取り組めるようになることが言われている。また、体験学習後のリフレクション（ふり返し）は、学習効果を高めることも知られており、図2の学生の感想からも多くの「気づき」があったことが伺えた。また、事後アンケートでは「講義前に比べて環境への取り組みに対し、少しでも行動変化が生じたか？」の問いに対して、82%以上の学生が「はい」あるいは、どちらかといえば「はい」と回答した。

自己効力感の低下は、大学生活のみならず就職してからの早期離職の要因にも繋がると考えられており、自己効力感の向上にアクティブラーニングを活用することが有用であると思われる。医療栄養学科では、大学4年間において高麗川プロジェクトをはじめ、専門職連携（IPW）実習やがん患者さん向けレシピ作成など様々なアクティブラーニングを教育に取り入れており、これら総合的な活動効果が学生の自己効力感の向上に繋がると考えており、今後も実践とその有用性を評価していく考えである。

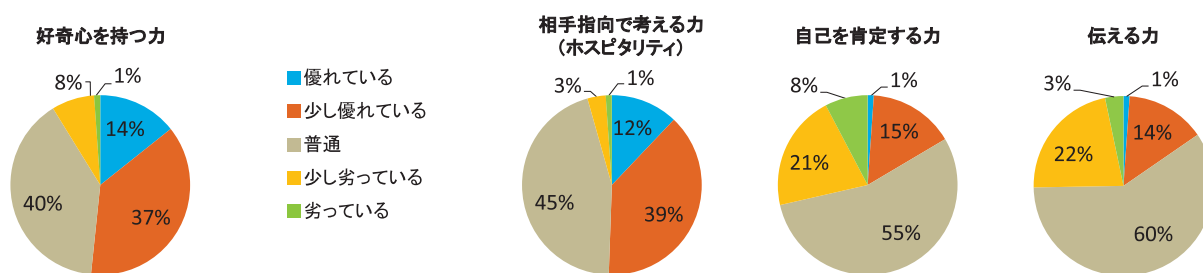


図1 自己評価アンケート（調査項目の一部）

川の環境を綺麗に保っている背景には、地域の人々の協力や城西大学の川ガールによる活動があるからこそだと今回の活動で身をもって感じる事ができました。事前学習で「なぜ川はきれいでなければならないのか」という議題について、身近に関する大事な議題として深く考える事ができました。

良い環境づくりの一環として行なっている高麗川清掃の活動にかなり興味を持ちました。管理栄養士として食に携わる職業に就きたいと考える私たちにとって、今回の体験は改めて生物の生きる環境と食のつながりを考える良い機会となったと思います。

水質汚染、環境破壊に繋がらないようにする為にも、掃除などをして川を綺麗に保つ必要があると思いました。大学では川ガールなど様々なボランティア活動があり、積極的に参加して綺麗な川の維持に貢献出来れば良いなと思います。

川をきれいにするためには、地域や大学の活動に加えて、個人一人ひとりの川をきれいにするという意識が大切だと思いました。清掃活動中に、地元の方と話す機会があり、城西大学の活動にとっても感謝しているとおっしゃって頂き、これからも大学の活動に積極的に取り組んでいきたいと思いました。地域全体で川の環境が保たれていることに気づきました。

図2 体験学習後の学生感想（抜粋）



図3 高麗川の美化活動を実践する医療栄養学科1年次生（20期生） 2020年10月30日

【地域活動ノート】

## 医療栄養学科における農作業体験を通じた 学生の食への興味・関心の向上に対する試み

——収穫したさつまいもを使ったレシピ作成

古屋牧子\*・岩田直洋\*・加藤勇太\*・関口祐介\*・君羅好史\*・大澤吉弘\*・松本明世\*・真野 博\*

### 活動の概要

医療栄養学科（管理栄養士養成課程）1年次の後期必修科目である「医療栄養学概論演習」において、秋の味覚である「さつまいも」の収穫体験および収穫したさつまいもを使った調理・レシピ作成を行った。本授業の目的は、農作物の収穫から消費までの流れを実体験することにより、「食」への興味・関心を向上させるとともに、管理栄養士に必要な農作物に関する知識を修得すること、また今年度は新型コロナウイルス感染症の流行により教場で同級生と共に学ぶ機会が少ないことから、同級生との交流も目的の一つとして、はじめて実施を試みた。レシピ課題の記載内容および事後アンケート結果より、目的とした学修成果が得られたことが示唆された。

キーワード：管理栄養士養成課程、農作物、収穫体験、レシピ作成、同級生との交流

医療栄養学科（管理栄養士養成課程）1年次の後期必修科目である「医療栄養学概論演習（全15回）」は、様々な領域で活躍する管理栄養士や関連職種の講師から話を聞くことで目指すべき管理栄養士像を掴むとともに基本的な知識を修得すること、また病院や介護保険施設などの職場を見学することを通して、医療人としての基本的な態度を身につけるとともにヒューマンコミュニケーションから患者さんの気持ちを理解することを目的として毎年開講している。今年度は新型コロナウイルス感染症の流行により、病院や介護保険施設への見学が困難であること、また大学生活において大切な存在である同級生との交流の機会が少ないことから、本演習の一部に新たな対面形式の授業を導入する必要がある。そこで今回我々は、城西大学坂戸キャンパスの緑に囲まれた豊かな自然環境を活かし、地元の農家の方と連携することで、農作物の収穫から消費までの流れを実際に体験し、「食」への興味や関心を向上させること、また管理栄養士に必要な農作物に関する知識を修得することに加え、同級生との交流も目的の一つとして、さつまいもの収穫体験および収穫したさつまいもを使った調理・レシピ作成を計画、実施した。

さつまいもの収穫体験は、2020年11月初旬、地元の農家の方および医療栄養学科の食育サークルDHA（Diet and Health Association; 食と健康のサークル）の上級生メンバーの支援の下で実施した。さつまいも畑において農家の方から今回収穫する2種類のさつまいもの特徴や収穫方法について説明があった後、収穫体験を行った（図1）。図2には収穫体験後の学生の感想の一例（自由記載、一部抜粋）を示した。収穫翌日に行われたオンライン授業において、担当教員がさつまいもの品種、起源・歴史、産地、栄養成分、味、色など食品学的な特徴について説明した後、学生は持ち帰ったさつまいもを使い、自宅にて調理・レシピ作成を行った。

---

\* 城西大学薬学部医療栄養学科



図1 さつまいも畑での収穫の様子



収穫体験後の学生の感想（一例、抜粋）

今回の収穫体験を通し、自分で種から植え育て、収穫するまでの流れを体験した上で野菜を食べてみたいと感じました。また、今回の地域の方との交流を通して、スーパーで売っている輸入野菜を食べるよりも日本で生産されたその地域で作られた野菜についてもっと調べ、積極的に食べていきたいと感じました。食についてのプロになるためには、野菜や植物などがどのように育っていくのかにも注目していく必要があると強く感じました。

今回私達は、収穫時期を迎えた芋を収穫しただけですが、そこまで育てるには誰かの手がかかっていると思うので、普段の食材も直接目に見えない人の努力によって食べることができるのだと改めて実感しました。管理栄養士は食育としてそういうことを伝えていく必要があると思いました。今回は実際に体験できたので、それを今後も意識して食材を選ぼうと思いました。

管理栄養士として食材を調理することは大切ですが、その食材を調理するまでに多くの方々がかかわってくださっているからこそ、こうした食事を作ることができるのだと改めて実感しました。

図2 収穫体験後の感想の一例

学生が作成したレシピ課題の一例を図3に示した。レシピ課題の記載内容より、多くの学生がさつまいもに関する食品学および調理学的な知識を修得していることが推察された。図4には授業終了後に実施したアンケートの結果（抜粋）を示した。授業を受ける前に比べ、食物の収穫から消費までの流れに興味・関心を持つようになった者（「はい」またはどちらかといえば「はい」と回答した者）は88.6%だった。また、授業を受ける前に比べ、調理やレシピ作成について興味・関心を持つようになった者は88.8%だった。以上の結果から、本授業により、農作物の収穫から消費までの流れや「食」に関する興味・関心が向上したこと、管理栄養士に必要な農作物に関する知識を修得することが示唆された。フィールドワーク全体について、対面での演習形式の授業に参加してよかったと感じた者が97.7%だったことから、本授業が大学生活において大切な存在である同級生との良い交流の機会になったことが示唆された。

料理名	さつまいもたっぷりごはん	旬の食材	さつまいも
材料（2人分）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・安納芋：1/4個</li> <li>・太白：1/4個</li> <li>・お米：1合</li> <li>・酒：大さじ1/2</li> <li>・塩：小さじ1/2</li> <li>・水：190ml</li> </ul>		
作り方	<ol style="list-style-type: none"> <li>① お米を水で研ぐ。</li> <li>② さつまいもは泥を洗い流し、皮を剥く。皮を剥いたら「いちょう切り」にし、水にさらす。</li> <li>③ 炊飯器に洗ったお米を入れ、酒と塩を加え、お米の1合分の目盛りまで水を足す。いちょう切りにしたさつまいもをのせてスイッチを入れる。</li> <li>④ お米が炊けたら、混ぜ合わせて器に盛り付け完成。</li> </ol>		
【作成したレシピの感想や工夫した点】	<p>お米を炊く前に酒を入れることで、酒に含まれる糖質によってご飯の崩れを防ぎました。また、ふっくらとしたつやと甘みを感じられました。さらに塩を入れることで、よりご飯の甘みを引き立ててくれます。</p> <p>(安納芋と太白では安納芋の方が黄色が濃かったです。食べる前は「黄色が濃い安納芋の方が甘いかな」と思っていたのですが、実際に食べてみると「太白」の方が私は甘く感じました。)</p>		

図3 学生が作成したレシピ課題の一例

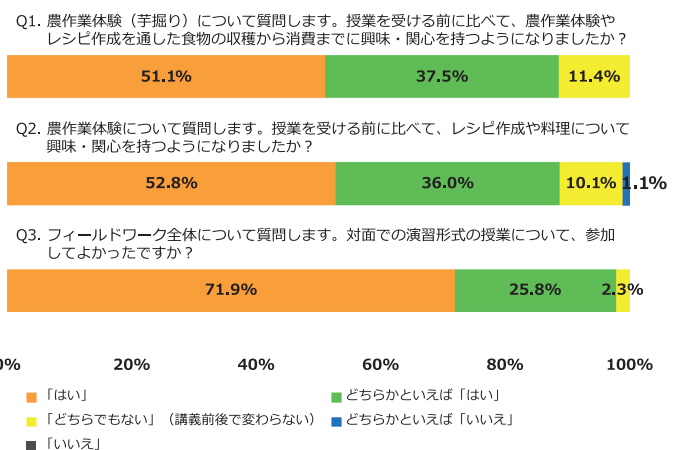


図4 農作業体験に対する学生の評価（事後アンケートより抜粋）



【地域活動ノート】

## 管理栄養士資格を有する大学院生による 特定健康診査の機会を利用した食育活動

——ときがわ町における3年間にわたる実践報告——

君羅好史\*、加藤勇太\*、荒井 健\*、大澤吉弘\*\*、清水 純\*\*\*、真野 博\*\*\*

### 活動の概要

城西大学大学院薬学研究科の総合医療栄養学演習において、ときがわ町特定健診の機会を利用した成人向けの食育啓発活動を行ってきた。本食育啓発活動では、管理栄養士資格を有した大学院生が「減塩」や「野菜摂取量の増加」という地域住民の課題に焦点を当て、食育啓発ポスターを作成し、特定健診受診者を対象として健康食育教室を実施した。本取組は、管理栄養士資格を有する大学院生が実践の場を通じて栄養教育の方法を学ぶのと同時に地域住民の食育機会としても機能している。

キーワード：埼玉県ときがわ町、地域活性化、特定健康診査、食育、管理栄養士

城西大学大学院薬学研究科における総合医療栄養学演習は、医療栄養学を構成する臨床栄養、食毒性、栄養政策管理の3分野の関連を理解するために、それぞれの分野で用いられる基本的事項、試料の取り扱い、解析方法、評価方法およびそれぞれの分野の概念について演習と実習を併用することにより学び、医療栄養学の基本的な知識と技能を身につけること、また、対象者に対して栄養教育・栄養指導に有効な方法を例示して説明できるようになることを目的として開講されている。本演習の一環として、本演習を履修する管理栄養士資格を有する大学院生が、ときがわ町の特定健診受診者を対象とした食育啓発活動を2018年より実施してきた。

本食育啓発活動では、食育ポスターの作成と特定健診受診者に対する健康食育教室を実施した。食育ポスターは、ときがわ町住民の健康課題に焦点を当て、「減塩」と「野菜摂取量の増加」をテーマに大学院生が作成した。健康食育教室は、ときがわ町保健センターの協力を得て、40歳（年度末年齢）から74歳（健診日年齢）の国民健康保険加入者に対して実施する特定健診受診者に実施した。ときがわ町の特定健診は2会場（アスパアたまがわ、ときがわ町体育センター）を使用し、6日間の日程で実施されており、2018年には740人、2019年には731人が受診している。なお2020年については、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から本演習での健康食育教室の実施は中止となった。健診会場内のスペースに大学院生が作成した食育ポスターを掲出し、特定健診の受診者が採血後止血までにかかる時間を利用して、大学院生が「減塩」と「野菜摂取量の増加」についてのプレゼンテーションを実施した。大学院生は「正しい情報」を伝えるだけでなく、対象者にとってわかりやすい伝え方を意識し、日々の生活に取り入れられる方法などを交えてプレゼンテーションを実施した。また、ポスターやプレゼンテーションに対する対象者からの反応や質問された内容などをもとにして、自分自身や大学院生同士でフィードバックを行い、特定健診が実施された6日間の中で発表

---

\* 城西大学薬学部医療栄養学科助教

\*\* 城西大学薬学部医療栄養学科助手

\*\*\* 城西大学薬学部医療栄養学科教授

内容や言葉使い、目線などの改善を試みていた。

本演習は、ときがわ町の特定健診では、多数の住民が一つの会場に集まり、数日に渡り実施される点を活かして健康食育教室を実施できることから、大学院生が栄養教育の方法を学び、実践する機会を得ることにつながっている。また、大学院生が実施する食育啓発活動は、ときがわ町住民の健康に寄与する食育機会を作り出すことに貢献していると言える。

本取組がきっかけとなり、ときがわ町の広報誌『広報ときがわ』2019年11月号から大学院生と教員が食や健康について執筆するコラム「食は体をつくる～城西大学通信～」を掲載している。大学院生の学びを言語化し誌面を通じた栄養教育を実践する場になるとともに、継続した地域住民への食育機会の提供にもつながっている。



図1. ときがわ町特定健診で健康食育教室を実施する大学院生



図2. 広報ときがわに掲載された大学院生が執筆するコラム「食は体をつくる～城西大学通信～」2020年2月28日発行No.170 3月号

【地域活動ノート】

## 管理栄養士有資格者大学院生の特論演習科目を通じた 地域活性化の取組

——「北坂戸にぎわいサロン通信 薬学部医療栄養学科コラム&レシピ」の作成——

野村佳歩\*、塩原由菜\*\*、手塚宥哉\*\*、久保正徳\*\*、大澤吉弘\*\*\*、君羅好史\*\*\*\*、真野 博\*\*\*\*\*

### 活動の概要

「北坂戸にぎわいサロン」は坂戸市が北坂戸駅周辺のにぎわい再生と地域の活性化を目的とし城西大学並びに東京電機大学と連携し開設したものである。当講座に所属する大学院生の必修科目の栄養機能解析学特論演習において、「北坂戸にぎわいサロン」で配布する食育啓発活動媒体の作成を行なっている。本食育啓発活動媒体は栄養、食品機能性成分、地産地消、地元名産品に焦点をあて、超高齢社会を念頭に高齢者でも作りやすい、食べやすい、さらに仲間や家族を呼んで楽しめるなど社会的活性化も目的としている。本取組は、地域活性化とともに、管理栄養士資格を有する大学院生のアクティブラーニングとして機能している。

キーワード：北坂戸にぎわいサロン、地域活性化、教育方法、食育、管理栄養士

坂戸市は、北坂戸団地にぎわい再生事業として住宅団地再生に関して事業を実施する大学に対し、当該事業に要する経費を助成することにより、地域の活性化及び協働によるまちづくりの推進を目指している。具体的にはUR都市機構の施設に設置した太陽光発電システムによる売電収入で空き店舗を借上げ、大学と連携し、にぎわい再生の拠点施設である「北坂戸にぎわいサロン」を運営している。北坂戸駅の北口の「にぎわいサロン」を城西大学、南口の「にぎわいサロン」を東京電機大学が開設している。これらの施設は、地域住民が自由に活用できる。本学が関与している北口側の施設ののべの利用者数は、2015年は8,622名、2016年は10,286名、2017年は7,033名、2018年は6,957名、2019年は6,539名である。また、本施設の情報媒体として城西大学総務課が発行している「北坂戸にぎわいサロン通信」は、北坂戸駅周辺の泉町、上吉田、芦山町、伊豆の山町、末広町、溝端町、薬師町の5,863戸に回覧板として、また北坂戸団地商店会と北坂戸けやき通り商栄会の会員には個別に配布されている。「北坂戸にぎわいサロン通信」の内容は、本学の様々な「取組や情報」と「薬学部医療栄養学科コラム&レシピ」である（図1）。

一方、栄養機能解析学特論演習の授業の目的は「極めて高度な専門性と豊かな学識を有し、豊かな人間性と社会性を兼ね備え、地域および国際社会の発展を積極的にリードできるようになるため、最新の生命科学の進展の成果を基礎として、食品機能成分の生体作用を、遺伝情報の発現・制御（ゲノミクス）、タンパク質の機能発現・制御（プロテオミクス）、代謝物の変動の制御（メタボノミクス）、および物理化学的性質の情報に基づいて議論するための知識、態度、技能を自ら調査・解析し、プレゼンテーションによって修得す

- 
- \* 城西大学大学院薬学研究科薬科学専攻 博士後期課程3年
  - \*\* 城西大学大学院薬学研究科医療栄養学専攻 博士前期課程1年
  - \*\*\* 城西大学薬学部医療栄養学科助手
  - \*\*\*\* 城西大学薬学部医療栄養学科助教
  - \*\*\*\*\* 城西大学薬学部医療栄養学科教授



図1. 北坂戸にぎわいサロン通信 の見本  
2020年9月1日発行 (第65号)

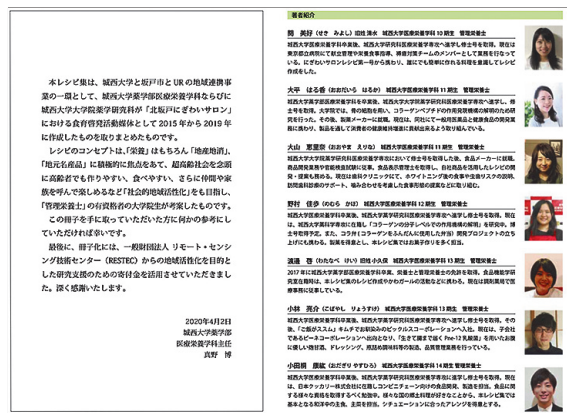
る。」としている。そこで、本特論演習として、本演習を履修する大学院生が順番に、「食育啓発活動媒体」として「北坂戸にぎわいサロン通信」の「薬学部医療栄養学科コラム&レシピ」を作成する。1. 毎月一回発行 2. 講座のゼミで方針を発表 3. 原案を作成しゼミで発表 4. 本学総務課に原稿を送る 5. 出版物のJURA登録の5ステップを学生が行う。

学生は、「栄養量設定」、「栄養価計算」、「機能性成分」はもちろん「地産地消」、「地元名産品」に積極的に焦点をあて、超高齢社会を念頭に高齢者でも作りやすい、食べやすい、さらに仲間や家族を呼んで楽しめるなど「社会的活性化」をも目指し考案する。

2020年4月には一般財団法人 リモート・センシング技術センター (RESTEC) からの地域活性化を目的とした研究支援のための寄付金を活用し、これまでの「薬学部医療栄養学科コラム&レシピ」を1冊にまとめ、坂戸市役所、ときがわ町保健センターなどで配布するとともに、オープンキャンパス等でも活用している。



図2. 冊子化したレシピ集  
2016年3月から2020年3月の「薬学部医療栄養学科コラム&レシピ」を一冊にまとめた。



【地域活動ノート】

## 「疑わしくは行動せよ！」J-DAG (Just-Disaster Action Game) を活用した地域連携・教育実践例の紹介

飯塚智規\*

### 活動の概要

J-DAG (Just-Disaster Action Game) とは、大地震発災直後の緊迫した状況をリアルタイムで模擬体験し、減災のための「適切な判断と行動力」の習得と「防災体制」の検証ができる、実践的訓練ゲームのことである。このゲームを開発したのは、横浜市内で主に防災活動を行っている市民団体である「防災塾・だるま」（塾長は神奈川大学の荏本孝久教授）である。ゲームといっても、その内容は事実上、災害対応の図上シミュレーション訓練であり、本来であれば行政職員が受けなければならない、質の高い訓練である。筆者は防災塾・だるまの協力のもと、学部の地域イノベーション（現、地域防災政策）の講義で、毎年度学生に訓練を受けさせている（2020年度はオンラインでの開講のため未実施）。また鶴ヶ島市地域活動推進課の依頼で、2020年2月19日に鶴ヶ島市富士見市民センターにて、鶴ヶ島市内の自治会等の住民代表達を対象に本訓練を実施し、地域防災力の向上に寄与する活動を行っている。

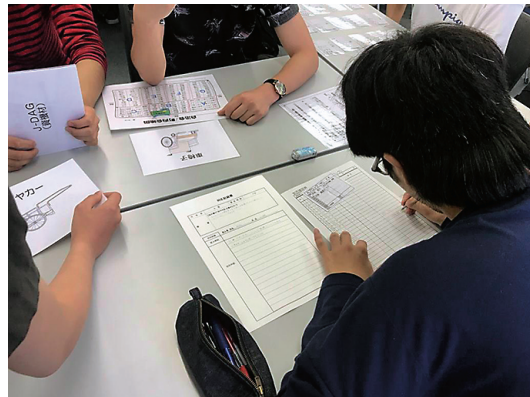
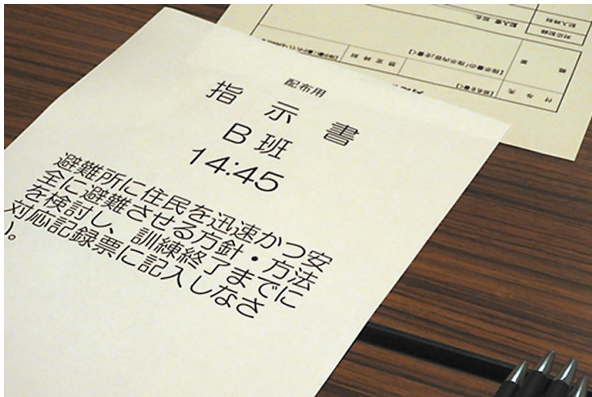
キーワード：鶴ヶ島市、J-DAG (Just-Disaster Action Game)、地域防災、図上シミュレーション訓練、防災塾・だるま

J-DAGの目的・内容は、訓練に参加したメンバーが仮想の自治会・町内会の役員となって、いくつかの班に分かれて図上で災害対応の指揮を執る、というものである。災害対応の具体的中身は、町内の住民の安否確認や資機材の管理、情報の収集・報告等である。受講者達は本部と複数の班に分かれて災害対応を行う。本部と各班には、①トランシーバー、②地域住宅地図、③住民リスト、④安否確認表、⑤資機材配備表、⑥地震情報、⑦対応記録票が用意されている。受講者達は訓練開始とともに、自分の班の住民リストを確認し、安否確認を行わなければならない。しかし架空の町内会で実際に安否確認の行動を取ることはできないので、住民の安否情報が世帯ごとに記載されている直後家族情報カードの置かれたデスクに行き、自分の班の住民のカードを全て探し出して自分の班に持ち帰り、安否状況を確認して安否確認表に記入しなければならない。

また訓練中に、コントローラー（訓練運営者）から指示書が各班に配布される。そこに書かれた内容については対応を検討して、どのような対応をすべきか対応記録票に記載しなければならない。消火や搬送など、指示によっては資機材がなければ対応できないものもある。その場合には、受講者は備蓄庫のデスクから、必要な資機材のカードを借りてこなければならない。班と班との間の情報連絡のやり取りは、口頭で直接行うのではなく、各班に用意したトランシーバーを用いて行うことになる。

---

\* 城西大学現代政策学部助教



訓練中に配布される指示書（左）と、対応記録票へ記載する様子（右）



トランシーバーでの連絡のやり取り：左は鶴ヶ島市での訓練、右は地域防災政策での訓練の様子



左は資機材カードによる資機材の管理、右は直後家族情報カードによる安否確認の集計の様子

ここで紹介している活動の詳細については、以下を参照してください。

城西大学ホームページ： <https://www.josai.ac.jp/news/20200220-01.html>

飯塚智規 (2019) 「地域防災というテーマを通じて受講者達は何を学び何に気づいたのかー地域イノベーション I Aにおける3つの取組からー」『城西現代政策研究』12巻1号

【地域活動ノート】

## 東武鉄道越生線沿線プロモーション作品の制作

庭田文近\*・現代政策学部庭田ソフォモアセミナー2020年度履修生\*\*

### 活動の概要

城西大学現代政策学部の2年次セミナー科目である庭田ソフォモアセミナーは、グループワークによる大学周辺地域の観光・地域プロモーション活動を通じて、情報の収集・読解能力の向上と、調査・分析・資料作成・プレゼンテーション手法の修得を授業目的としている。2020年度は、越生線改善対策協議会<sup>1</sup>と連携し、東武鉄道越生線およびその沿線地域のプロモーション活動として、前期に沿線自治体のポスター、後期に越生線を扱った動画作品を制作した。新型コロナウイルス感染症拡大のため対面授業も学外授業も厳しい制約を受けるなか、オンライン授業を活用したり、感染対策を行いながらの少人数に分かれた実地活動により、作品を完成させることができた。

キーワード：越生線、コロナ禍、地元観光、地域プロモーション、地元愛

### 【地域PRポスター制作】

2020年度前期授業は、新型コロナウイルス感染症拡大のため、本学では対面授業が禁止された。当セミナーでも、Zoomを使ったオンライン授業で地域PRポスターを制作することが余儀なくされた。

そこで学生達は、越生線改善対策協議会の各自治体から提供された資料を輪読し、ポスターの制作にあたって2つのテーマを設定した。1つ目は、「越生線沿線ないしは近隣住民に対して越生線に乗って地元を観光してもらおう」である。コロナ禍によって県を跨いでの観光が躊躇されるなか、地域内での対流を促すことが目的である。2つ目は、「越生線沿線地域の住民に対して、地元愛（いわゆるシビック・プライド）を醸成させる」である。沿線住民に対して自分たちの地域の魅力を発信することで、「このまちに住み続けたい」・「このまちだから住みたい」と思ってもらうことが目的である。



\* 城西大学現代政策学部准教授  
 \*\* 村中皓（学生代表執筆者）・明石桃・伊藤孝将・稲妻快・大野匠望・勝澤順基・勝野拓磨・佐藤南海・柴崎良輔・千崎航汰・中川貴博・中澤薫乃・村田翔・村西祐哉。  
 1 埼玉県の坂戸市・鶴ヶ島市・毛呂山町・越生町・鳩山町・ときがわ町から構成され、事務局は越生町企画財政課に置かれる。

ポスターの制作は、Zoomのブレイクアウトルーム機能を使って、2～3人のグループに分かれて行った。フィールドワークができず、資料とインターネット情報のみで観光資源や地域の魅力を探るのは、風土の実感がわきづらく、やや迷走するグループもあったが、グループの枠を超えて議論・協力しあうことで、制作が進んでいった。現地へ行けないため、過去に自分たちで撮影した写真がない場合は、イラストを描いて地域の雰囲気が出るようにした。また、手書きの文字を配置することで温かみを強調してコロナ禍の閉塞的な心理状態に響くように工夫をするグループや、あえて細かな文字で長文のメッセージをレイアウトすることで読破意欲をそそる工夫をするグループも見られた。

## 【越生線プロモーション動画制作】

対面授業が解禁された後期は、東武鉄道越生線のプロモーション動画の制作を行った。

まず、前期に制作したポスターの発表・批評を踏まえて、新たに4人のグループに再編し直した。また、動画のテーマも、前期を踏襲し、越生線沿線の地元観光の推進と地元愛の醸成とした。次いで、全国各地で作られているシティ・プロモーション動画の鑑賞・批評や、越生線沿線の地域資源とその活用に関する全体ディスカッションを行った後、各グループに分かれて作品タイトルの設定とシナリオの作成を行った。シナリオは、ややもすると物語に拘り過ぎてしまい、地域プロモーションという目的から逸脱しそうになったため、何度か経過発表と検討会を実施した。教室内では、飛沫感染対策のために間隔を離れて座らなければならず、議論や作業のやりづらさはあった。

撮影に際しては、コロナ禍での感染対策として、マスクを着用した少人数での行動、密集・密接・密閉状態の回避、こまめな消毒などが徹底された。また、撮影後の長時間におよぶ編集作業は、授業外にZoomやファイル共有サービスでオンライン・グループ作業を行うなど、作品の完成に向けて学生が主体的にプロジェクトを遂行していった。



## 【活動を終えて】

前期に制作したPRポスターは、坂戸市役所庁舎内と東武鉄道越生線の越生駅構内に展示された。また、後期に制作したプロモーション動画は、PRポスターとともに、越生線改善対策協議会を構成する市・町のホームページで紹介された。

今年度は、コロナ禍での活動だったため、積極的には地域の方々との交流を持てなかったのが残念であった（後期は、撮影地の方々に協力してもらったなど、多少の関わりは持てたが）。

この1年間の活動を通して、地域活性化や観光・交通の研究に興味を持ったり、自分の地域の魅力を再認識し、郷土に愛着を持つ学生が少なからず現れたことは喜ばしいことである。



## 2020年度 城西大学・城西短期大学の地域活動

地域	活動名	活動者	期間	概要
埼玉県	埼玉東上地域大学教育プラットフォーム (TJUP) 副代表校	地域連携センター	2020年度	埼玉東上地域大学教育プラットフォーム (TJUP) は、埼玉県の東武東上線沿線および西武線沿線の大学・自治体・企業が連携するプラットフォームであり、「地元で生まれ、地元で育ち、地元で生きていく若い世代への支援」というビジョンのもと、「多様な高等教育」・「生活しやすい地域づくり」・「地域産業の活性化」に関するさまざまな活動を行っている。
埼玉県	彩の国連携力育成プロジェクト大学間連携運営連絡会議	SAIPE委員会	2020年度	彩の国連携力育成プロジェクト (SAIPE) は、埼玉県立大学、埼玉医科大学、城西大学、日本工業大学および埼玉県が協定を結び、埼玉県の保健医療福祉専門職を中心とした連携力の育成を目指した取り組みである。 この会議では月に一度4大学の教職員が一堂に会し、今後の事業や実習、演習等について意見を出し合い情報を共有する。今年度は、新型コロナウイルス感染症の影響を踏まえ、Zoom等を用いて遠隔にて開催している。
埼玉県	テレビ番組オリジナルヒーローの製作	石井龍太 (経営学部准教授) 経営学部基礎ゼミ II (石井)	2020年～	経営学部石井ゼミナールの「地域振興におけるキャラクターの活用実践」として、埼玉県をモチーフとしたローカルヒーローをテレビ局の依頼を受けて製作した。
埼玉県	彩の国連携力育成プロジェクト「IPW実習」	SAIPE委員会 医療栄養学科学学生 薬科学科学学生	2020年10月1日 ～2020年10月8日	彩の国連携力育成プロジェクトで実施運営している彩の国連携科目の一つとして、IPW (多職種連携) 実習を実施している。今年度は埼玉県内の各施設 (病院、高齢者施設、障がい者施設等) のペーパーパイシエント (5事例) を用いて、利用者及び患者を対象に専門分野の異なる4大学の学生 (埼

				<p>玉県立大学、埼玉医科大学、城西大学、日本工業大学) が、オンラインにて対象者の支援計画を作成することで、チーム形成のプロセスや多職種による連携を学んだ。オリエンテーション2日間、実習3日間、全体報告会が1日の、合計6日間の実習である。</p>
埼玉県	<p>第3回彩の国連携力育成プロジェクト 『緩和ケアIPW(多職種連携)研修会』</p>	SAIPE委員会	2020年11月21日	<p>模擬患者を活用したチーム活動を通して、緩和ケアにおける「チーム形成」、「課題解決」、「地域連携」のプロセスを体験し、より良い緩和ケアのための連携実践(IPW)に繋がる“連携力”を育成することを主な目的とし、埼玉県内の保健医療福祉施設に勤務する現職者を対象として実施している。</p> <p>今回の研修会は、オンラインによる遠隔で実施したことから、「オンラインによる遠隔」と「対面」の「やりとり(連携)」の違いについても考える機会となった。</p>
埼玉県	2020年度城西大学公開講座	キャリアサポートセンター	2020年12月2日・9日・16日	<p>高度化・多様化する地域住民の学習意欲と地域社会のニーズに応えることを目的に、本学の教育研究成果を広く地域に開放するため、毎年公開講座を実施している。</p> <p>今年度は、藤野陽三(城西大学学長)「城西大学と地域連携」、伊関友伸(経営学部教授)「新型コロナウイルスと埼玉県の医療政策について考える」、安田英典(理学部数学科教授)「ゲーム理論と感染症流行伝搬シミュレーション」の3講座を実施した。</p> <p>協賛:埼玉県「埼玉まなびいプロジェクト」</p> <p>後援:坂戸市・鶴ヶ島市・日高市・川越市・飯能市・東松山市・毛呂山町・越生町・鳩山町・川島町の各教育委員会、彩の国大学コンソーシアム、埼玉新聞社、埼玉東上地域大学教育プラットフォーム</p>

埼玉県	埼玉県における「連携力の高い人材育成」を目指した職能団体と4大学の意見交換会	SAIPE委員会	2020年12月10日	2018年度から県内職能団体の方々と埼玉県における「連携力の高い人材育成」を目指した意見交換会を開催している。今年度は、新型コロナウイルス感染症の影響を踏まえ、Zoom等を用いた遠隔での意見交換会を開催した。
埼玉県	彩の国連携力育成プロジェクト「IPW演習（緩和医療学）」	SAIPE委員会 薬学科学学生 薬科学科学学生 医療栄養学科学学生	2021年1月8日	模擬患者を活用し、「がん終末期の患者の、身体的・精神的苦痛を和らげるにはどうしたらいいか」「患者の家族のフォローはどうすればいいのか」4大学から異なる分野（医学、理学療法、生活環境デザイン、薬学、医療栄養）の学生がオンラインにて集まり、連携してよりよいケアプランを考える。 今年度は、新型コロナウイルス感染症の影響を踏まえ、Zoom等を用いて遠隔にて実施した。
埼玉県	コバトン健康ダンスへのローカルヒーローの参加	石井龍太（経営学部准教授） 経営学部石井ゼミナール	2021年2月6日	経営学部石井ゼミナールの「地域振興におけるキャラクターの活用実践」として、埼玉県が推奨する「コバトン健康ダンス」に石井ゼミのキャラクター4名が参加し、動画を投稿した。テレビ埼玉にて放送。
小川町	道の駅おがわまちと連携した観光振興プロジェクト	庭田文近（現代政策学部准教授） 現代政策学部 庭田ゼミナール	2020年度	現代政策学部庭田ゼミナール3・4年生は、2016年度より国土交通省の道の駅・大学連携プロジェクトに参加し、道の駅おがわまちを拠点に、小川町の観光振興プロジェクトを企画・実施している。 2020年度は、現地での活動はかなり制限されたが、以下の4つのプロジェクトを進行した。①小川和紙の副産物である楮の葉を活用した“栄養ちゃんとトルティーヤ”の開発、②小川町のディープ・ツーリズムのプロモーション動画“小川町DIVER”の制作・配信、③小川町の地場産品の取扱店の調査とマップ化、④小川町の萌えキャラの開発と観光活用の検討。

小川町	短期大学「日本文化研修Ⅰ」（留学生対象科目・集中講義）における学外授業	村越純子（短期大学准教授） 短期大学留学生	2020年12月11日	短期大学に置かれた「日本文化研修Ⅰ」は、留学生（1年生）に地域の歴史や文化を理解させることを目的としている。その一環として、小川町和紙体験学習センターにおいて紙漉きに挑戦し、小川町観光協会の「おがわまちなか散歩ツアー」に参加して観光案内員とともに名所旧跡をめぐる、という体験型学習をおこなった。この体験型学習は、小川町にぎわい創出課との連携により実現した。
越生町	越生線沿線活性化プロモーション活動	庭田文近（現代政策学部准教授） 現代政策学部 庭田ソフォモアセミナー	2020年度	現代政策学部庭田ソフォモアセミナー（2年生）の学生が、越生線改善対策協議会と連携して、越生町のPRポスターおよび越生線沿線のプロモーション動画を制作した。越生駅構内にポスターが期間限定で展示されるとともに、越生町役場のホームページには動画とポスターが公開された。
川越市	リレー・フォー・ライフ・ジャパン川越2020への参加	SAIPE委員会 薬学部学生	2020年9月～	本学・埼玉県立大学・埼玉医科大学・日本工業大学の学生が共に、がん患者さんご家族、がん経験者さんに対してリレーを通して支援をするがん制圧に向けた世界共通のチャリティーイベントに参加している。 今年度は、新型コロナウイルス感染症流行のためにリレーがバーチャルとなったが、そのような中でも、我々からも少しでも元気を送りたいと、有志が集まって動画を作成した。
坂戸市	坂戸市高齢者福祉及介護保険事業審議会委員	于洋（現代政策学部教授）	2020年度	
坂戸市	坂戸市国民健康保険運営協議会 委員	于洋（現代政策学部教授）	2020年度	

坂戸市	坂戸市地域福祉計画 審議会 委員	于洋（現代政策 学部教授）	2020年度	
坂戸市	坂戸市総合計画審議 会 会長	庭田文近（現代 政策学部准教授）	2020年度	
坂戸市	坂戸市市民参加推進 会議 会長	柳澤智美（現代 政策学部准教授）	2020年度	
坂戸市	「坂戸だゾウ」プロ ジェクト	庭田文近（現代 政策学部准教授） 現代政策学部 庭田ゼミナール	2020年度	現代政策学部庭田ゼミナール4年生が、坂戸市内に伝わる民話を漫画化し、その舞台となっている場所の紀行ガイド冊子「坂戸だゾウ」を作り、インターネットで公開するとともに、坂戸市内の公共施設に配布した。
坂戸市	越生線沿線活性化プ ロモーション活動	庭田文近（現代 政策学部准教授） 現代政策学部 庭田ソフォモア セミナー	2020年度	現代政策学部庭田ソフォモアセミナー（2年生）の学生が、越生線改善対策協議会と連携して、坂戸市のPRポスターおよび越生線沿線のプロモーション動画を制作した。坂戸市役所庁舎内にポスターが期間限定で展示されるとともに、坂戸市役所のホームページには動画とポスターが公開された。
坂戸市	短期大学科目「地域 連携Ⅱ」における川 角駅前パン屋との連携	三國信夫（短期 大学准教授） 短期大学「地域 連携Ⅱ」履修生	2020年9月～ 2021年1月	城西短期大学ビジネス総合学科の科目「地域連携Ⅱ」の履修生が、東武鉄道越生線川角駅前のパン屋「サン・シーロ」を訪れ、パン屋ビジネスの概要等を学ぶ機会をいただく一方で、新メニューや新サービスについて提案した。
坂戸市	コロナ禍における地 域活性化活動の試み	庭田文近（現代 政策学部准教授） 現代政策学部 「地域イノベー ションⅡ」履修生	2020年度9月～ 2021年1月	現代政策学部の専門科目「地域イノベーションⅡ」の履修生（3～4年生）が、6つのグループに分かれて、コロナ禍でも可能な地域活動・コロナ禍だからこそ必要とされている地域活動を企画・実施した。  実施した活動：①防犯ポスターの制作と西坂戸地区への掲示、②坂戸の民話の読み聞かせ動画の制作・インター

				ネット公開、③英語字幕付きの観光プロモーション動画の制作・インターネット公開、④家の中でできる体操の開発と動画のインターネット公開、⑤読書を推奨する葉の作成と坂戸市立児童センターへの配布、⑥Twitterを使った坂戸市内のテイクアウト可能な飲食店の定期的な紹介。
坂戸市	「坂戸駅北口イルミネーション」の告知	田部溪哉（経営学部助教） 経営学部田部ゼミナール	2020年10月1日～2020年12月1日	経営学部田部ゼミナール（広告論）の活動の一環として、坂戸市中心商業地研究会・サンロード商店会と連携し、坂戸駅北口イルミネーションの広告表現の制作を行った。そして、店頭広告として30店舗に張り出すとともに、折り込み広告として坂戸市内に約10,000部を配布した。
坂戸市	ビブリオバトル2020 in 城西大学	水田記念図書館	2020年10月7日	水田記念図書館（坂戸キャンパス）よりオンライン配信でビブリオバトル学内大会を開催した。 8名の学生が制限時間の5分を使って紹介本の魅力を観客に伝えた。 地域相互協力館の加盟館である日高市立図書館職員が観戦された。 本大会でチャンプ本を発表した学生は、その後全国予選～準決勝まで勝ち進んだ。
坂戸市	高麗川の美化活動	岩田直洋（薬学部医療栄養学科助教） 医療栄養学科1年生	2020年10月30日	医療栄養学科1年生科目「医療栄養学概論演習」において、高麗川プロジェクトの一環である高麗川の美化活動に参加した。
坂戸市	坂戸キャンパス近隣農家との連携による農作業体験	古屋牧子（薬学部医療栄養学科准教授） 医療栄養学科1年生	2020年11月4日	医療栄養学科1年生科目「医療栄養学概論演習」において、城西大学坂戸キャンパス近隣の地元農家と連携し、学生がさつまいもの収穫から消費までを体験した。

坂戸市	「坂戸市が大学生に問題解決を依頼したい市の政策課題」の解決策の探究	柴沼真（経営学部准教授） 経営学部「キャリアデザインⅡ」履修生	2020年11月9日～2021年1月18日	経営学部の科目「キャリアデザインⅡ」の授業内で、坂戸市役所政策企画課より、「坂戸市が大学生に問題解決を依頼したい市の政策課題」を紹介いただき、グループでその課題解決を探究し、市の担当部局にその解決策をプレゼンするという内容を実施した。
坂戸市	小学校オンライン教室	柳澤智美（現代政策学部准教授） 現代政策学部「ボランティア」履修生	2020年12月1日～2021年1月31日	現代政策学部の科目「ボランティア」の授業として、坂戸市立城山学園の小学生を対象に、学生がオンラインでプログラミングの基礎を教えた。
坂戸市	「坂戸駅北口イルミネーション」へのローカルヒーローの参加	石井龍太（経営学部准教授） 経営学部石井ゼミナール	2020年12月6日	経営学部石井ゼミナールの「地域振興におけるキャラクターの活用実践」として、坂戸駅北口イルミネーションにローカルヒーロー2名が登場し、来場者に衛生啓発カードを配布すると共に希望者と記念撮影を行った。またJCOMTVにてテレビ放送された。
坂戸市	「鈴木遂峰書展」関連企画：作家によるギャラリートークの開催	水田美術館 鈴木雅勝（経済学部准教授）	2021年1月23日・2月8日	「鈴木遂峰書展」関連企画として、水田美術館2階ギャラリー1において、作家であり本学経済学部准教授の鈴木雅勝によるギャラリートークを開催した。
坂戸市・鶴ヶ島市	坂戸、鶴ヶ島下水道組合運営委員会 委員	勝浦信幸（経済学部客員教授）	2020年度	
鶴ヶ島市	鶴ヶ島市市民協働推進委員会 委員	柳澤智美（現代政策学部准教授）	2020年度	
鶴ヶ島市	越生線沿線活性化プロモーション活動	庭田文近（現代政策学部准教授） 現代政策学部庭田ソフォモアセミナー	2020年度	現代政策学部庭田ソフォモアセミナー（2年生）の学生が、越生線改善対策協議会と連携して、鶴ヶ島市のPRポスターおよび越生線沿線のプロモーション動画を制作した。動画とポスターは、鶴ヶ島市役所のホームページに公開された。

鶴ヶ島市	NPO法人つるがしま里山サポートクラブでのボランティア活動	柳澤智美（現代政策学部准教授） 現代政策学部「ボランティア」履修生	2020年12月1日～2021年1月31日	現代政策学部の科目「ボランティア」の授業として、学生がNPO法人つるがしま里山サポートクラブのイベントに参加し、地域の方々とともに里山で竹を切り、伝統的な門松を作った。
鶴ヶ島市	「第7回環境おしゃべりカフェ：自分ごととして考えるSDGs」講師	勝浦信幸（経済学部客員教授）	2021年1月24日	鶴ヶ島市大橋市民センターで開催された「第7回環境おしゃべりカフェ：自分ごととして考えるSDGs」（エコ鶴市民の会主催、鶴ヶ島市生活環境課協力）において、「鶴ヶ島の未来の環境を考える」をテーマに、SDGsについて詳細に解説するとともに、2030アジェンダの基本を理解して自分ごととすることの重要性について講演した。
ときがわ町	越生線沿線活性化プロモーション活動	庭田文近（現代政策学部准教授） 現代政策学部庭田ソフォモアセミナー	2020年度	現代政策学部庭田ソフォモアセミナー（2年生）の学生が、越生線改善対策協議会と連携して、ときがわ町のPRポスターおよび越生線沿線のプロモーション動画を制作した。
鳩山町	越生線沿線活性化プロモーション活動	庭田文近（現代政策学部准教授） 現代政策学部庭田ソフォモアセミナー	2020年度	現代政策学部庭田ソフォモアセミナー（2年生）の学生が、越生線改善対策協議会と連携して、鳩山町のPRポスターおよび越生線沿線のプロモーション動画を制作した。
東松山市	令和2年度第1回市民環境会議「協働による持続可能なまちづくり」オンラインZoom講演会 講師	勝浦信幸（経済学部客員教授）	2020年11月8日	第2次東松山市環境基本計画に基づく市と市民協働による環境まちづくり活動の普及啓発イベントとして毎年開催されている講演会に、講師として参加した。
日高市	日高市市民参加推進会議 副会長	庭田文近（現代政策学部准教授）	2020年度	
日高市	日高市立図書館主催ビブリオバトル2020冬の陣への参加	水田記念図書館	2020年12月19日	図書館学生アドバイザー1名（経済学部3年生）が出演し、制限時間の5分間を使って紹介本の魅力を伝え、準チャンプ本を獲得した。公共図書館と



				の相互協力協定により、イベント開催時には出場依頼がある。
毛呂山町	越生線沿線活性化プロモーション活動	庭田文近（現代政策学部准教授） 現代政策学部庭田ソフォモアセミナー	2020年度	現代政策学部庭田ソフォモアセミナー（2年生）の学生が、越生線改善対策協議会と連携して、毛呂山町のPRポスターおよび越生線沿線のプロモーション動画を制作した。
毛呂山町	「無いよりマシ」作戦（衛生啓発キャラクターと手作りマスク頒布）	石井龍太（経営学部准教授） 経営学部石井ゼミナール	2020年4月4日	経営学部石井ゼミナールの「地域振興におけるキャラクターの活用実践」として、東武鉄道越生線武州長瀬駅前にて、ローカルヒーローによる衛生啓発キャラクターと手作りマスクの頒布会を、午前と午後の2回実施した。
神奈川県 藤沢市	HEROゴミ拾い	石井龍太（経営学部准教授） 経営学部石井ゼミナール	2020年9月19日	経営学部石井ゼミナールの「地域振興におけるキャラクターの活用実践」として、NPO法人海さくらと連携し、片瀬東浜海岸において、ローカルヒーローによる海岸の清掃作業に参加した。
福井県 越前市	希少野生生物の環境DNA分析によるモニタリング研修 講師	石黒直哉（理学部化学科教授）	2020年12月18日	現在環境省事業において越前市と進めている、種の保存法対象種に指定されているアベサンショウウオの環境DNAを用いた生息域モニタリングの調査結果について報告し、採水方法の研修を行った。

\*2021年2月28日申告分まで掲載している。

※特に県名が付されていない地域は、埼玉県内の自治体である。

## 『地域と大学——城西大学・城西短期大学地域連携センター紀要』 投稿規程

### 1. 目的

『地域と大学——城西大学・城西短期大学地域連携センター紀要 (Journal of Josai Community Liaison Center)』(以下「紀要」)は、城西大学・城西短期大学地域連携センター(以下「地域連携センター」)ないしは本学の地域活動・地域研究により蓄積された成果を掲載し刊行することにより、地域連携活動および地域を舞台とした教育・地域を対象とした研究を促進することを目的とする。

### 2. 発行

- (1) 紀要は年1回発行する。
- (2) 紀要の編集は、地域連携センター内に設置する紀要編集委員会(以下「編集委員会」)が取り扱う。
- (3) 編集委員会は、編集長1名と編集委員2名、および担当事務員1名から構成される。
- (4) 編集長および発行責任者は、地域連携センター長とする。
- (5) 編集委員は、地域連携センター運営委員の中から文系学部・理系学部各1名ずつの計2名とする。

### 3. 区分

- (1) 紀要に投稿・掲載する原稿は、ひろく地域に関するテーマで執筆された未刊行のものであり、以下の①～⑥の区分のものとする。
  - ①査読論文
  - ②論文
  - ③地域調査報告
  - ④地域教育実践報告
  - ⑤地域活動ノート(1件につきA4サイズ横書き日本語で2頁以内)
  - ⑥その他(地域連携報告、地域情報、地域資料、講演録、書評など)
- (2) 執筆者は、投稿時に希望の区分を提示する。
- (3) 使用言語は、区分⑤以外は特に定めない。
- (4) 字数または枚数制限および横書き・縦書きは、区分⑤以外は特に定めない。

### 4. 執筆資格

- (1) 城西大学・城西短期大学の教職員・事務職員：専任・非常勤を問わず、上記区分の全てを執筆・投稿することができる。
- (2) 城西大学・城西短期大学名誉教授および定年退職者：上記区分の全てを執筆・投稿することができる。
- (3) 城西大学・城西大学大学院・城西短期大学の在学生：上記区分⑤を執筆・投稿することができる。

きる。なお、城西大学大学院博士後期課程在学者は、上記区分④以外の全てを執筆・投稿することができる。

※その他、卒業生や学外者などであっても、上記の資格者との共著であれば当該区分を執筆・投稿することができる。また、編集委員会が特に認めた者は、単著で執筆・投稿することができる。

## 5. 執筆要領

- (1) 使用言語および分量は、投稿区分⑤以外は特に定めない。
- (2) 文章は原則として黒字だが、特に必要な場合は図・表・写真などはカラーを使うこともできる。
- (3) 申込後、掲載可となった場合は、別に定める区分ごとの「執筆要領」に基づいて掲載用原稿を執筆する。

## 6. 掲載の採否

- (1) 区分①については、編集委員会が委嘱する査読者による審査に基づき、編集委員会が決定する。
- (2) 上記区分以外については、編集委員会が決定する。

## 7. 発行形態および公開

- (1) 紀要は、電子ファイルおよび冊子にて発行する。
- (2) 電子ファイルは、地域連携センターホームページおよび城西大学機関リポジトリ (JURA) からインターネット上に公開する。

## 8. 著作権

- (1) 掲載された著作物の著作権は、著作者が保持する。
- (2) 掲載された著作物の著作者は、当該著作物に関する複製及び公衆送信を編集委員会に対して許諾したものとみなす。編集委員会が複製及び公衆送信を第3者に委託した場合も同様とする。

## 9. 原稿料等

- (1) 執筆者に対して、原稿料は支払わない。
- (2) 抜き刷りおよび冊子は、希望者に有償で提供する。

2020年9月

城西大学・城西短期大学地域連携センター 紀要編集委員会

## 編 集 後 記

さて、この『地域と大学』を手にとったあなたは、どのように活用しますか？

城西大学・城西短期大学は、この地、けやき台に開学して以来、「学問による人間形成」を理念として、極めて多くの地域の方々、企業、並びに自治体等の方々とともに、学生教育に邁進して参りました。

このような地域活動・研究により蓄積された成果を掲載し刊行すること、地域連携による教育・研究を促進することを目的として、本紀要を創刊いたしました。

創刊号には、査読論文や論文をはじめ、地域教育実践報告、地域連携報告、地域情報、地域活動ノートに、12報を投稿いただくことができました。執筆者の方々に心から感謝し、お礼申し上げます。

また、本紀要は、地域連携に取り組まれている教職員の方々はもちろんのこと、とくに、「地域活動ノート」は、地域研究・地域課題解決のための活動などを実践された、学生の皆さんに「活動を通して得られた、自身の成長と学修の成果」の記録とすると共に、社会へ、そして先輩、同級生、さらに後輩へ伝えるものとして、活用してもらえることを期待しています。

城西大学・城西短期大学地域連携センター紀要編集委員会

松本明世（編集委員長）

高尾浩一

庭田文近

渡辺沙織（総務課地域連携担当）

地域と大学——城西大学・城西短期大学地域連携センター紀要 創刊号

---

令和3年3月31日 発行

編集者 城西大学・城西短期大学地域連携センター紀要編集委員会  
発行者 城西大学・城西短期大学地域連携センター  
印刷者 有限会社 東京工芸社  
発行所 城西大学  
埼玉県坂戸市けやき台1-1  
TEL 049-286-2233 (代)  
〒350-0295

---

Printed in Japan ISSN 2436-2336(Print) 2436-2530(Online)  
©2021 城西大学

# Journal of Josai Community Liaison Center

No.1 March 2021

## CONTENTS

Preface .....	FUJINO Yozo	1
	YU Yang	2
<b>[Peer-Reviewed Article]</b>		
Birth of "OKUMUSASHI" .....	KATOH Hiroyuki	4
<b>[Article]</b>		
Characteristics of Beni ume : an endemic species to Japanese plum in Ogose town .....IIZUKA Yuzuru, KIM Hyounju, MATSUMOTO Akiyo, KIMIRA Yoshifumi, SHIMIZU Jun, MANO Hiroshi		16
<b>[Reports]</b>		
Interprofessional education(IPE) with the philosophy of "realizing high-quality lifestyles for local residents" in Saitama prefecture - Saitama Interprofessional Education Project (SAIPE) .....FURUYA Makiko, UEDA Hideo, SHIRAHATA Akira, OSHIMA Shigeru, MURATA Isamu, TAKAO Koichi, KOITO Hisami, HORI Yumiko, MIZUNO Fumio, IWATA Naohiro, HOSOYA Osamu, KOBAYASHI Daisuke		22
Education for the Regional Contribution with the cooperation of the Industry Promotion Section of Ogawa town : A case study of the Off-campus class of Japanese Studies for foreign students in Josai Junior College .....MURAKOSHI Junko		28
The library will collaborate with the community - We will be a hub of knowledge and a hub for the community .....OGAWA Kanako, MIYAUCHI Hiroko, KOTA Satomi		39
<b>[Information]</b>		
I saw Osaki ! - Witnesses of unknown creatures handed down in the Hanno / Chichibu area .....HIRAI Daisaku, HIRAI Ami, KATOH Hiroyuki		48
<b>[Notes]</b>		
Attempt to improve students' self-efficacy through active learning in department of clinical dietetics and human nutrition, faculty of pharmacy and pharmaceutical sciences - Activity report of the komagawa projects by exercise on human nutritional science .....IWATA Naohiro, FURUYA Makiko, SEKIGUCHI Yuusuke, KIMIRA Yoshifumi, OSAWA Yoshihiro, MATSUMOTO Akiyo, MANO Hiroshi		52
Attempt to improve students' interest in food through agricultural experience in department of clinical dietetics and human nutrition, faculty of pharmacy and pharmaceutical sciences - Creating recipes using sweet potatoes harvested by the students themselves .....FURUYA Makiko, IWATA Naohiro, KATO Yuta, SEKIGUCHI Yuusuke, KIMURA Yoshifumi, OSAWA Yoshihiro, MATSUMOTO Akiyo, MANO Hiroshi		54
Nutrition education by graduate students certified as registered dietitians at the occasion of specific health checkups - A Three-Year Report on Practice in Tokigawa Town .....KIMIRA Yoshifumi, KATO Yuta, ARAI Takeshi, OSAWA Yoshihiro, SHIMIZU Jun, MANO Hiroshi		56
Efforts for regional revitalization through special lectures of registered dietitian graduate students .....NOMURA Kano, SHIOBARA Yuna, TEZUKA Yuya, KUBO Masanori, OSAWA Yoshihiro, KIMIRA Yoshifumi, MANO Hiroshi		58
Introduction of practical examples of community collaboration and education using J-DAG (Just-Disaster Action Game) ..... IIZUKA Tomoki		60
Production of Works to Promote the Tobu Ogose Line and Surrounding Areas ..... NIWATA Fumichika, Niwata Sophomore Seminar 2020		62
Annual Report 2020		64

JOSAI UNIVERSITY and JOSAI JUNIOR COLLEGE  
Community Liaison Center

1-1 Keyakidai, Sakado-shi, Saitama, JAPAN